

# 多縄紋土器編年に関する一考察

——「室谷下層式直後，井草式以前」を中心として——

山形 真理子

## 1. はじめに

この論文は、縄紋時代草創期の多縄紋土器の編年について、特に副題に示した時期をとり上げて論じるものである。井草式土器の直前にあたる時期、そして井草式に並行する時期の他地域の土器編年の問題については、現在もさかんに議論が行なわれている。多縄紋土器の中でも「表裏縄紋土器群」と呼ばれる一群は、井草式との編年的関係がしばしば言及されるものであるが、それらの編年観については研究者によってかなりの違いがある。筆者はこの論文で、「表裏縄紋土器」を含む多縄紋土器群について、室谷下層式と井草式の間編年的位置を求められるものと、さらには中部地方で井草式並行まで編年的位置が下げられるものがあるという編年観を、提示するつもりである。つまり、室谷下層式と井草式の間には時間的隔たりがあり、その井草式直前段階の土器の様相は、関東より西ではかなり明らかにされ得ると考えるのである。中部地方など西の地域から、井草式直前ならびに並行段階の土器が明らかになることは、関東の井草式の成立と展開に関する議論にも、重要な視点を与えるに違いない（註1）。

筆者は、この問題に関連する資料を出土した、静岡県伊東市三の原遺跡の調査に参加することができた。三の原遺跡からは、表裏縄紋を含む相当量の多縄紋土器が出土したほか、井草Ⅰ式の破片も数点得られた。報告書を作成していく過程で、三の原遺跡の多縄紋土器が、「室谷下層式直後，井草式以前」の土器編年に関して、少なからぬ問題提起を行なうであろうことに気がついた。報告書は既に刊行されたが（山形ほか1991）、その執筆の時点では、多縄紋土器に関する筆者の分析・考察は不十分なものであった。そこで、あらためて三の原遺跡出土資料を見直し、その編年的位置を探る試みを契機として、三の原資料から新たに導かれた視点に立って見た時に、当該期の土器編年はいかに見通されるべきかという問題意識をもって、論じていくこととしたい。

## 2. 問題の提起 —三の原遺跡出土多縄紋土器の検討—

### (1) 三の原遺跡出土多縄紋土器の分類について

まず、筆者の分析の基本となる三の原遺跡の多縄紋土器について、あらためてここで説明を加えたいと思う。報告書では多縄紋を第1群としてまとめ、さらに以下のように分類した（註2）。

- 1類 井草式土器
- 2類 口縁部に円形刺突紋をもつ表裏縄紋土器
- 3類 口唇上に縄紋施紋をもつ表裏縄紋・表縄紋の土器
  - a 表裏縄紋
  - b 表縄紋
- 4類 口唇上に縄紋施紋をもたない表裏縄紋・表縄紋の土器
  - a 表裏縄紋
  - b 表縄紋
  - c 特に新相を示すと考えられる表縄紋
- 5類 口唇部が外反する縄紋土器
- 6類 第1群土器の底部

上記の分類に従って、三の原遺跡の多縄紋土器の概要を説明する。

**1類：井草式土器（第1図1～3）**

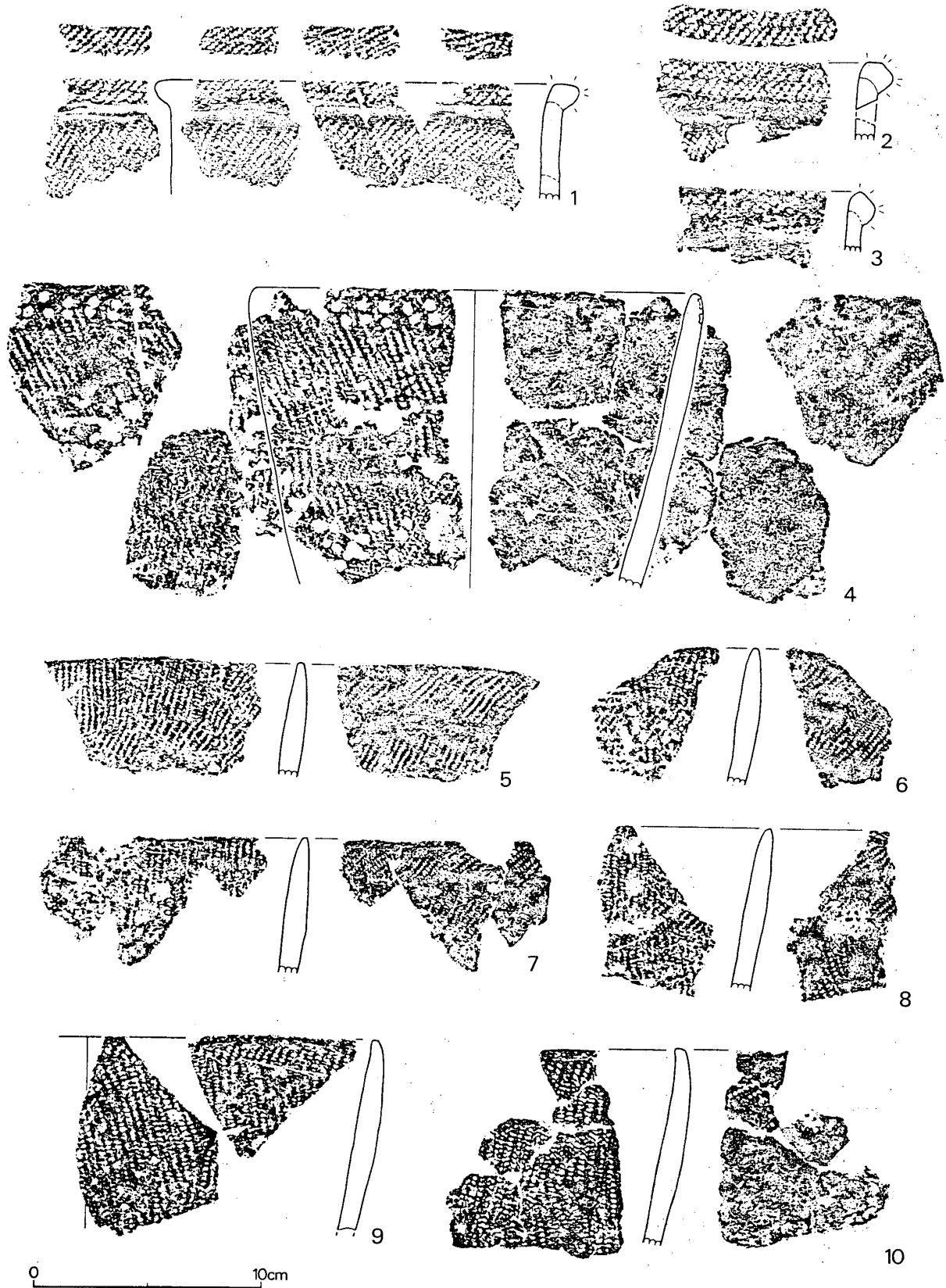
井草式の破片は6点得られ、3個体に分別された。暗茶褐色を呈し、繊維は含まないものと判断した。直立する口縁部は大きく外側に肥厚する。口唇部上端から口縁肥厚部下面まで、3列の縄紋LRを横位施紋する。胴部上半もLRの横位施紋である。胴部下半は欠損するが、縦走縄紋であったことは間違いなく、第1図1右の破片の下方に若干縦に走る縄紋が見えている。

**2類：口縁部に円形刺突紋をもつ表裏縄紋の土器（第1図4）**

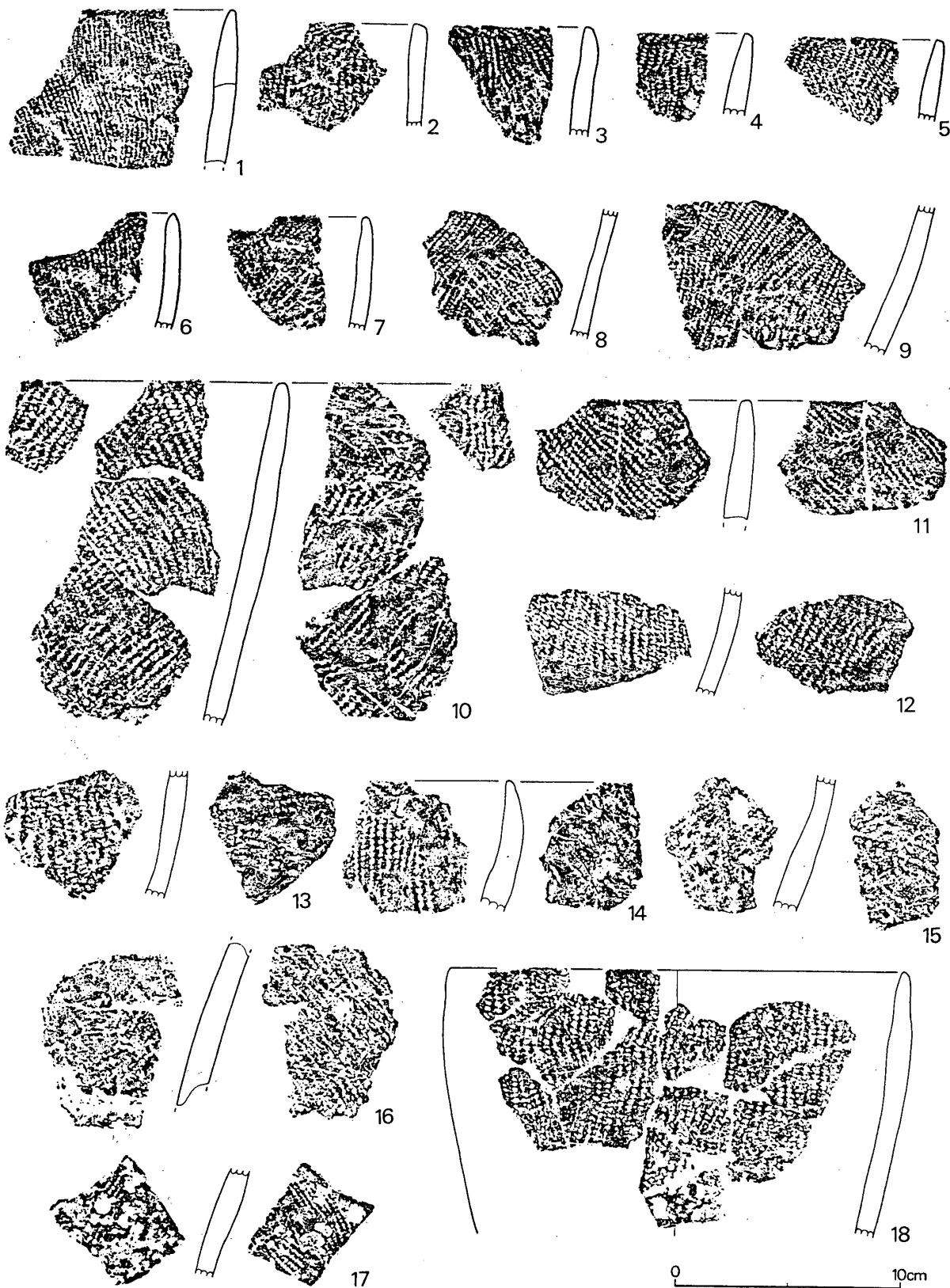
三の原の多縄紋土器の中で、口縁部に紋様をもつ唯一の土器である。復原口径19.0cm、器厚0.8cm（～部分的に1.1cm）である。暗茶褐色～茶褐色を呈す。繊維を含み、細かい白色砂粒を含む胎土は、比較的脆弱である。口縁部は直立し、平縁で、断面形は円頭状を呈す。口唇部上端の幅狭な箇所を縄紋LRを横位回転している。器表面はLRを左下→右上に回転させることにより、条を縦走させている。ただし胴部下半では横位回転となり、条の方向が変わっている部分がある。縄の粒は扁平な形状である。口縁部の紋様は、竹管先端を利用した上下二列の刺突紋で、縄紋施紋の後、下段→上段の順序で施紋されている。裏面は輪積痕も指頭圧痕も見られず、比較的平滑である。表裏縄紋とは言っても、ただ一つの破片の一部にのみ裏面施紋が見られた。まばらな、かなり浅い施紋で、縄紋LRを横方向に転がしている。なお口縁部刺突紋のあたり、また裏面の胴部上半部分にも大量にススが付着していた。

**3類：口唇上に縄紋施紋をもつ表裏縄紋・表縄紋の土器（第1図5～10、第2図1～9）**

本遺跡の多縄紋土器のうち主体を占めるのが3類（口唇上に縄紋施紋をもつ表裏縄紋・表縄紋の土器）と4類（口唇上に縄紋施紋をもたない表裏縄紋・表縄紋の土器）である。ここでは口唇上の施紋の有無をメルクマールとして類別を表現しているが、その他にも複数の属性が結び付いて、それぞれの独自性が発揮されている。



第1図 井草Ⅰ式土器及び「室谷下層式直後，井草式直前」の多縄紋土器一三の原遺跡(1)一



第2図 「室谷下層式直後、井草式直前」の多縄紋土器一三の原遺跡(2)一

**3類 a** : 表裏縄紋 (第1図5~8)

いずれも同一個体である可能性が高い。暗茶褐色を呈す。胎土は若干量の繊維を含み、脆弱である。器厚0.9cm。口縁が直立し、口唇部に至るにつれて薄く作られているのが特徴的である。口唇部上のごく狭い箇所に縄紋LRを横位に施紋している。表面縄紋は条の縦走を意識し、基本的に左下→右上方向に回転しているが、部分的に横位回転となり、条が斜行する部分もある。裏面は口縁部直下から縄紋LRが横位施紋され、若干の空白部分をおいて、やはり横位に帯状に施紋される。第1図8の裏面下半部には、縦方向(下→上)に施紋された帯状の縄紋が見える。裏面に輪積痕や指頭圧痕は目立たない。縄の粒は小さく扁平な形状で、緻密な感じがする縄紋である。

**3類 b** : 表縄紋 (第1図9・10, 第2図1~9)

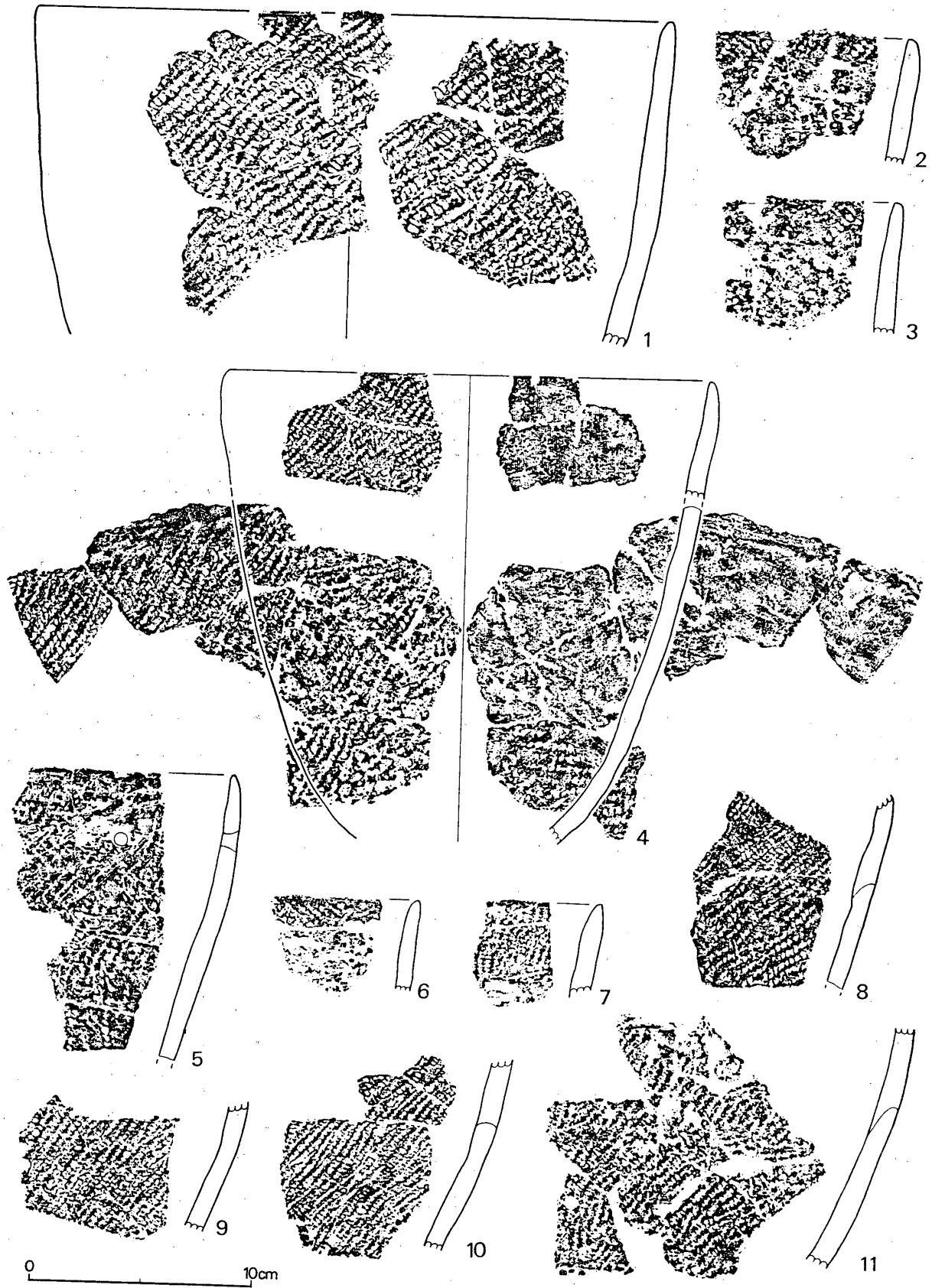
全体に暗茶褐色の色調で、すべて含繊維である。白色砂粒を多く含むものが多い。器厚はおおむね0.8~0.9cm, 薄手のもので0.6~0.7cm。口縁部は直線的に、あるいは若干内湾気味に立つ。平縁であるが、口縁部が少し上下に波うっているような部分がある。口唇部に至るにつれて薄く作られており、口唇部のごく狭い平坦部分に縄紋LRを横位施紋する。表縄紋は、まず口縁直下に幅狭なLRをひとめぐり横位に施紋し、以下の胴部は左下→右上方向に施紋して条を縦走させるものが多い。また縄紋の施紋方向を変えて、部分的に羽状のような構成とするものもある(第2図7・8)。縄の粒は比較的小さく、扁平な形状である。特に第2図1の縄紋は非常に細かい。縄はLRばかりであるが、中に太いRと細いRを撚り合わせて、付加条のような効果をあげているものがある。裏面はおおむね平滑にナデ調整されており、輪積痕や指頭圧痕は目立たない。ただし第2図1の輪積痕は明らかにわかるものであった。なお第1図10は、口縁よりやや下に裏面縄紋が見られ、厳密には表裏縄紋である。ただし3類aの、裏面も密に施された表裏縄紋とは区別される上に、土器自体は第1図9と酷似することから、3類bに含めることとした。

この3類は、口縁部形態・色調・胎土・縄紋原体・紋様施紋方法などの諸属性が密接に結び付いて、全体として非常に斉一的な土器群であるということが出来る。それらの属性に照らし合わせると、口縁部紋様をもつ2類も、円形刺突紋を除いた特徴は3類のものであることが分かる。

**4類** : 口唇上に縄紋施紋をもたない表裏縄紋・表縄紋の土器 (第2図10~18, 第3図)

3類が幅狭い口唇部上に縄紋を回転施紋したのに対し、4類は口唇上に施紋を行わないものを一括した。他に幾つかの属性について、3類とは明確に区別される。口縁については、直立する平縁であり、口唇部に至るにつれて薄く作られる点は3類と同じである。色調は、3類と同じく暗茶褐色を呈するものもあるが、赤みをおびた茶褐色のものもある。胎土は、すべて繊維を含むことは3類と同じであるが、3類よりも繊維痕が目立つ。縄紋は、3類が縦走縄紋を明らかに意識したのに対し、4類には縦走縄紋もあるが、横位回転による斜行縄紋もある。3類はLR一色であったが、4類はRLなど他種類の縄も用いている。縄の粒は3類より大きく、丸みを帯びた形状が普通である。さらに、裏面に輪積痕・指頭圧痕が顕著に残る点は特徴的である。

**4類 a** : 表裏縄紋 (第2図10~17)



第3図 「室谷下層式直後，井草式直前」の多縄紋土器一三の原遺跡(3)一

4類の表裏縄紋にはバリエーションがあり、単純に特徴を抽出することは難しいが、裏面縄紋は胴部下半にまで及ぶ点は共通している。第2図10は、3類と同じく口縁部に沿ってLRを横位回転するが、後から施紋された縄紋に消された部分が多い。以下、斜め（左下→右上）もしくは横位の方向に施紋する。これは3類に近い施紋法をとっている土器である。裏面縄紋は表面よりは疎であるが、基本的に横位施紋で、胴部下半にまで至っている。第2図14~16は表面の方に施紋の空白があり、裏面の方がむしろ密に施紋される稀な例で、しかも裏面は2種類の縄を用いる特異なものである。表面はLRである。第2図11は表裏面ともRLを用いる。

4類b：表縄紋（第2図18，第3図）

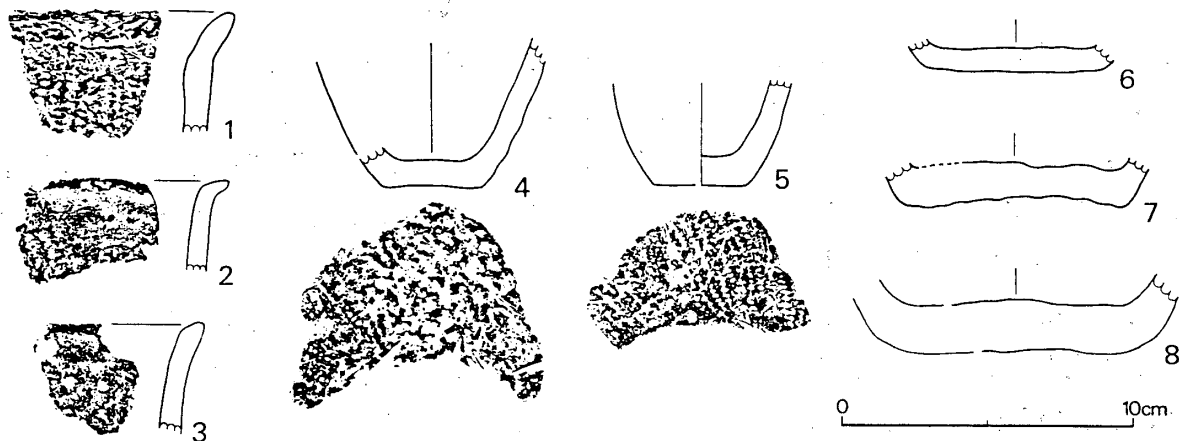
第2図18は、LRを縦走させることを意識していると思われるが、3類の口唇上施紋が無く、口縁直下の横位施紋も無い。縄の粒は丸みを帯びている。第3図1は、全面LRの斜行縄紋で、縄の粒は幅広く、大きい。第3図4もLRの斜行縄紋で、裏面の胴部下半の一部にのみ縄紋があるが、4類aの表裏縄紋とは区別した。輪積み部分の補強を目的としたような裏面施紋である。第3図5は、かなり薄い口縁部を成形した際の指頭圧痕が明瞭に残っている。基本的にLRを横位回転するが、RLを用いているらしい部分もある。第3図6もRLを用いる。

4類c：特に新相を示すと考えられる表縄紋

三の原遺跡の報告書では、第1群とした多縄紋の中でも特に新しいと考えられる幾つかの土器を4類cと分類した。それらの胎土・色調などは、むしろ第2群とした撚糸紋と類似するもので、時期的にも稻荷台式以降に属するものと考えられた。伊豆を含む静岡県東部地域では、稻荷台式~大浦山式並行期の在地土器の組成は、撚糸紋と縄紋から成っていることが近年明らかになりつつある。この論文で扱う時期とは異なるので、4類cについては触れない。なお、この論文中で一般的に「4類」という場合、この4類cを除いて考えていることを、ここでお断りしておきたい。

5類：口縁部が外反する縄紋土器（第4図1~3）

直立する口縁部を特徴とする三の原遺跡の多縄紋土器の中にあって、僅かに発見された外反口縁



第4図 「室谷下層式直後，井草式直前」の多縄紋土器—三の原遺跡(4)—

の土器は、非常に異質な資料である。第4図2・3は同一個体の破片数点が得られているが、口縁部を著しく外にめくっている部分とそうでない部分がある。第4図1の土器は、含繊維で黒褐色を呈す。先細り状の口縁部を外反させた時についたと思われる指頭圧痕が、特に裏面によく残っている。表面の胴部はLRを縦走させている。表面口縁部は横ナデを行なって紋様をすり消しているが、その部分に横走する圧痕があり、LRの短い側面圧痕を横につないでいると考えられる。

#### 6類：第1群土器の底部（第4図4～8）

多縄紋土器の底部を6類として一括したが、数は少ない。注目されるのは第4図4・5のような小型の平底である。円形であり、隅丸にはならない。それらは暗茶褐色を呈し、繊維を含み、脆弱な器面は剥落が著しいが、残存部分の縄紋は条が縦走している。これらの特徴は3類の土器に近いものであるが、4類の底部である可能性も否定できない。いずれにせよ本遺跡では、多縄紋に関わりそうな丸底や尖底は見られなかったので、少なくとも2・3・4類について、平底形態であったと理解することができる。

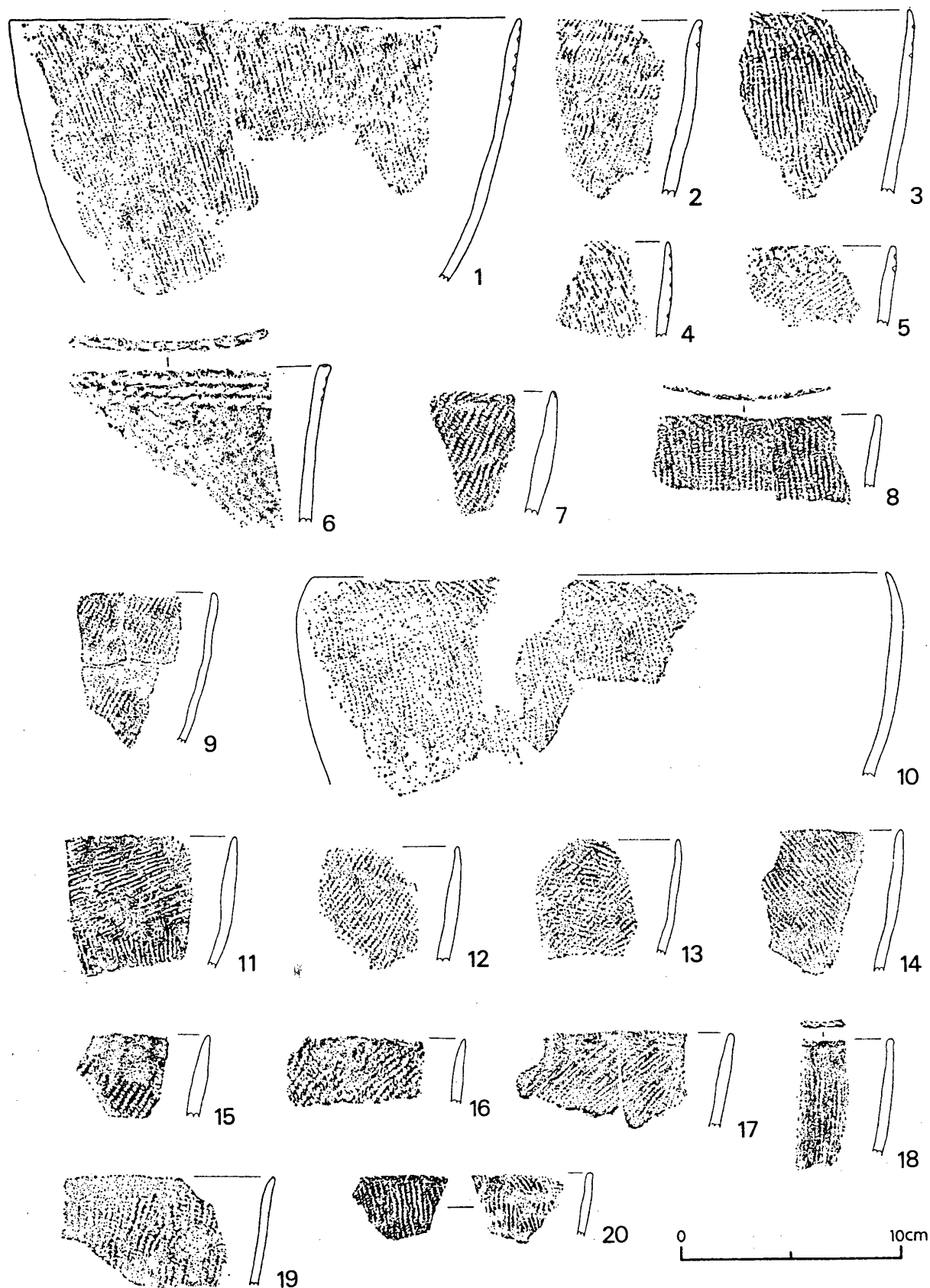
以上のような三の原遺跡の多縄紋土器について、報告書では、相互の型式学的な比較から、2類・3類→4類・5類という時間的序列を想定した。そして、1類とした井草式には、两段階のいずれかに共伴した他地域の土器という位置付けを与えたのである。重要なのは3類→4類という変遷観であるが、口唇上施紋をもち、縄紋の縦走を意識している3類から、口唇上施紋をしなくなり、縦走縄紋の他に斜行縄紋が多くなり、縄紋の種類・形状や施紋方法のバラエティが広がる4類に変化したのだらうと考えた。3類と型式学的属性を同じくする2類が、三の原遺跡で唯一の口縁部紋様を持つことも、2類ならびに3類の古相を示していると考えられる。ただし、このような型式学的解釈は、他遺跡資料との比較検討の中で、その合理性を確かめられるべきであろう。また、1類の井草式と他の類の多縄紋との編年的関係についても、本稿の論述にしたがって明らかにされるであろう。

#### (2) 視野の拡大 一三の原遺跡出土多縄紋土器の類例について一

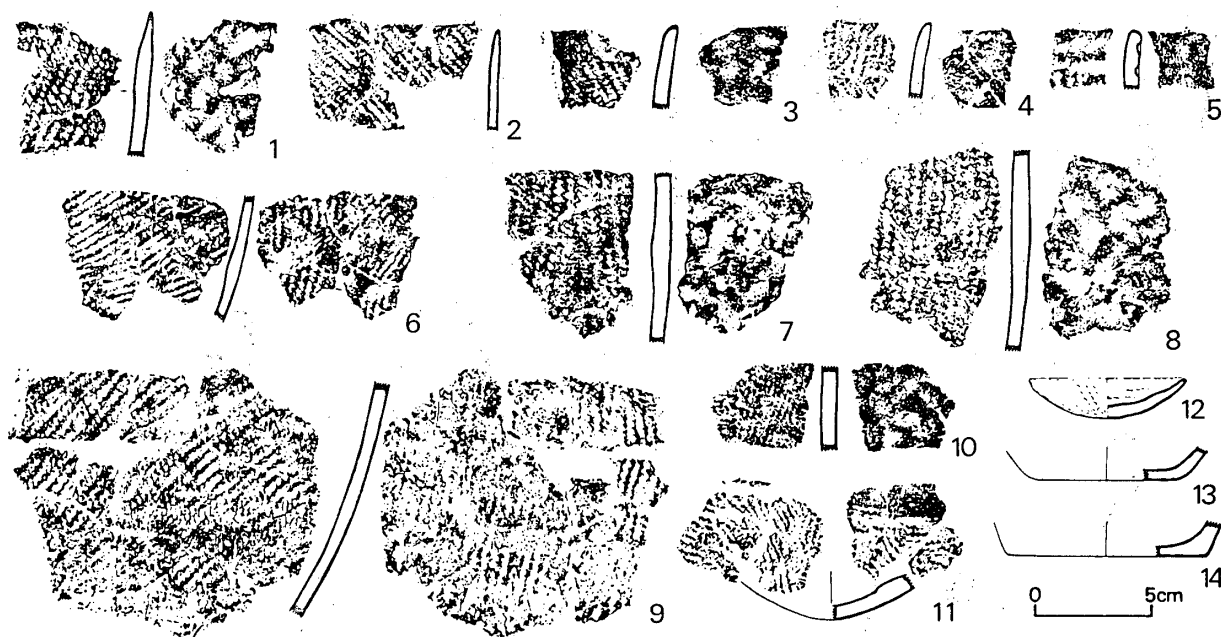
三の原遺跡第1群の主体となった直立口縁の2～4類について、その編年的位置を探っていくために、まずは類似資料を検索するべきであろう。三の原遺跡第1群2類の類例は、福井県鳥浜貝塚にある。鳥浜貝塚の最初の報告（鳥浜貝塚研究グループ1979）で、報告者のひとり網谷克彦氏は、出土した多縄紋土器（第1群）をA～E類に分別している。そのうちC類は、口縁部紋様を「撚糸と異なる工具で刺突するもの」である（第5図1～6）。撚糸側面圧痕紋、撚糸先端圧痕紋が盛行する中で、それ以外の工具を用いるものがC類であるが、その中に「半截竹管によるD字状爪形文を2列施文」したものがある（第5図5）。実見したところ、円形竹管を斜めにして刺突したと考えた方が良いように思われた。鳥浜には「不整形な菱形状の刺突」が5列・6列にわたって施紋されるものがあるが、その広い紋様幅がせばまって2列になったと考えれば、2列のものは若干新し



多縄紋土器編年に関する一考察



第5図 「室谷下層式直後，井草式直前」の多縄紋土器—鳥浜貝塚—



第6図 「室谷下層式直後，井草式直前」の多縄紋土器—椀の湖遺跡—

い様相を示す土器と行うことができそうである。

三の原第1群3類の類例も，同じく鳥浜貝塚に求められる（第5図7～20）。先述のE類は，「地文縄文以外に文様を持たないもの」であり，第5図7・8・10に見られる「口縁部5mm幅を横位に施文し，以下の胴部は施文方向を斜位にかえ，縄文を縦走させている」という特徴は，三の原3類と酷似する。鳥浜貝塚の多縄紋土器は，やや内湾気味の直立口縁であり，口唇部が薄手に作られるという特徴も三の原と似る。ただし鳥浜には口唇上の施紋はほとんど無い。また表裏縄紋の資料も非常に少ない。しかし，口縁部形態と紋様構成上の類似は明らかであろう。

4類の類例としては，岐阜県椀の湖遺跡の資料をあげることができる（第6図1～14）（原・紅村1958, 1974）。表裏縄紋を含む椀の湖の土器と，三の原の4類とを比べて共通点をあげると，口唇上施紋が無い（椀の湖には1点だけある）。やはり表裏縄紋の土器と表のみの縄紋土器がある。椀の湖の表面縄紋は，縦走に近い縄紋の破片もあるが，横位施紋による斜行縄紋が多い。裏面縄紋は胴部下半，底部ちかくまで施紋されている。裏面の輪積痕・指頭圧痕も顕著である。一方，両者の相違点として，底部形態の差をあげなければならない。両者とも底部資料は決して数多くないが，平底と丸底の違いがある。ただしこの差異を認めても，共通性を重視することはできると考えた（註3）。

2・3類の類例を鳥浜貝塚に，4類の類例を椀の湖遺跡に求めることができるとすれば，三の原遺跡と，西の二つの遺跡を，時間的に近い関係として結び付けることが可能になる。この関係は，当該期の多縄紋土器編年研究に幾つかの問題提起を与えることになると考えている。しかも三の原には，少数ながら，1類とした井草式，そして5類とした外反口縁の土器があった。

上のような内容の三の原遺跡出土資料は，研究史上にどのような意義をもつことができるのか。

それを知るために次に研究史をふりかえることとしたい。

### 3. 研究史から見た三の原遺跡出土資料の意義

多縄紋土器関係の研究史を瞥見した時、最も画期的な成果の一つとして、新潟県室谷洞窟の調査をあげることができよう（中村ほか1964）。周知のように、戦前に幾つかの型式が知られ、日本最古の土器と考えられてきた捺糸紋土器群は、1950年代前半の明治大学関係者による一連の調査により、その編年の大綱が整えられた（平坂貝塚—岡本1953、大丸遺跡—芹沢1957、夏島貝塚—杉原・芹沢1957、芹沢1954など）。しかしその直後の1950年代後半には、洞窟遺跡の調査の進展により、捺糸紋土器より古くなる可能性がある資料の報告が相次ぐ。そして1960年代初頭の室谷洞窟、長崎県福井洞穴（鎌木・芹沢1965）の調査成果は、各々異なる観点からではあるが、最古の縄紋土器探求の道筋を確実に遡らせたのである。

室谷の成果には幾つもの特筆すべき点があった。厳密に層位的な調査の結果、室谷上層土器群（室谷第Ⅱ群土器）・室谷下層土器群（室谷第Ⅰ群土器）の区分が明示されたこと・室谷上層土器群（室谷第Ⅱ群土器）が関東地方の捺糸紋土器群に対比されることが言明されたこと、実際に井草式に比定される破片が共伴したこと。さらにその下位より、6層から14層にわたって、豊富な押圧・回転縄紋の手法を持ち、平底に隅丸方形の口縁をもつ、きわめて特異な土器群が発見されたこと。それら室谷下層土器群（室谷第Ⅰ群土器）を層位的にとらえることにも成功したこと、などである。室谷の4・5層を関東の捺糸紋の系統を引くものとし、6層以下の室谷第Ⅰ群土器をそれを遡る古いものとする位置付けは、ただちに学界に受け入れられたわけではなかったが、調査参加者の一人である小林達雄氏の一連の奮闘によって、室谷の正当な評価が定着していったのである（栗原・小林1961、小林1962、小林1968）（註4）。

一時は最古の土器であった井草式については、千葉県西ノ城貝塚で細分の可能性が示され（井草式Ⅰ→井草式Ⅱ）（西村・芹沢ほか1955）、三浦半島で報告された平根山遺跡（岡本ほか1958）、馬の背山遺跡（岡本1959）では、西ノ城の成果に、さらに古くなりそうな一群（馬の背山第一群）を加えた、井草式の三つの傾向が指摘された。井草式の古い様相が見えてきた一方で、先述の通り室谷洞窟で第Ⅰ群土器の上層から発見された事実を受けて、室谷下層土器群と井草式の連絡について論じる考察が相次いで現われる（西村1965、原1966、小林1966、原ほか1967、小林1968）。ただしこれらの研究によって、室谷第Ⅰ群土器と井草式との間は、必ずしも完全には埋められないことが明らかになったとも言える（小林1968）。

さて、1958年に初めて報告された岐阜県椈の湖遺跡の土器は、表裏に縄紋施紋をもつ土器を含むもので、それまで中部・関東地方にほとんど類例が知られていない土器であった（原・紅村1958）。同じく表裏に縄紋をもつ土器を多量に出土した栃木県大谷寺洞窟の層位的データをもとに、山内清男氏は、椈の湖と大谷寺の表裏縄紋・表縄紋の土器を、井草式に先行する位置においたのである（山内1969）。この結果、今度は室谷第Ⅰ群土器に代わって、大谷寺Ⅲ式（埴1976）・椈の湖Ⅱ（原

・紅村1974)と言われる表裏縄紋・表縄紋からなる土器群が、井草式直前の位置を占めるものとして注目されることとなった。井草式の成立に栴の湖の影響を重視する論考も出される(鈴木1974)。表裏縄紋を含む縄紋土器群は、長野県を中心に中部地方にて数多く出現し(増野川子石遺跡—酒井ほか1973, 栴原岩陰遺跡—小松1976, 1978, 西沢1982, 三枚原遺跡—広瀬ほか1977, 高橋1982, 小佐原遺跡—広瀬1981, 1982, 向山遺跡—友野1982, 1983, 石畑岩陰遺跡—巾1988, など), 草創期の土器として, すっかり「表裏縄紋土器」の存在が定着する。

周知の通り「草創期」の提唱は, 山内清男・佐藤達夫氏の共著論文の中で1962年に行われた。この中で, 井草式・大丸式・夏島式・稲荷台式・花輪台式など, 当時撚糸文土器と呼称されていた土器群を「縄紋の多い型式群」と表現し, 花輪台Ⅱ式・平坂式・普門寺式など「縄紋のまれな型式群」との区別を指標として, 早期を二分する必要が説かれたのである(山内・佐藤1962)(註5)。のち山内氏は, 「縄紋の多い型式群」を「多縄紋型式群」と呼びかえる(山内1969)。一方, 同じ頃「縄文早期前半に関する問題」と題し, 多摩ニュータウン No.52 遺跡土器の分析を通して撚糸紋土器群を「様式」として再編成する試みを示した小林達雄氏は, のちに, 「早期」の「撚糸文系土器様式」に先行する, 草創期後半の押圧・回転縄文主体の土器群について, 「多縄文系土器様式」という用語を与えている(小林1977, 1978, 小林・安岡1979)。

室谷洞窟で層位的に把握された室谷下層土器群は, 小林達雄(1968), 佐藤達夫(1971)氏等の研究によって, 最下層から上層へむけて少なくとも三時期に分けられて理解されるようになった。その後, この室谷下層式に対比できる並行型式については, 福井県鳥浜貝塚(鳥浜貝塚研究グループ1979, 1981, 1983, 1984, 1985, 1987 a, b), そして静岡県仲道A遺跡(漆畑・渋谷ほか1986)にて, 多量の資料が得られることとなった。1986年の埼玉考古学会のシンポジウム「縄文草創期—爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題」は, 埼玉県宮林遺跡の発見を契機に, 爪形紋・押圧縄紋・回転縄紋の関係を論議の主眼としたが, 回転縄紋主体の土器群について, 鳥浜と仲道Aの関係, それらと室谷下層・水久保(小林・安岡1979)との関係, いわゆる表裏縄紋土器群と井草式, あるいは押型紋との関係など, 懸案となっている様々な問題が議論の俎上に乗せられたのである(埼玉考古学会1988)。

以上の研究の流れを念頭において, いま問題となっている幾つかの点についてあげてみると, まず, 鳥浜と仲道Aを, それぞれ厳密に室谷下層式に対比させる作業が必要となっている。既に仲道Aについては, 渋谷昌彦氏が室谷下層式・一ノ沢式に対比しながら編年を行ない, 仲道A式を提唱しており(渋谷1988), 大塚達朗氏は, 室谷下層の変遷に沿う形で, 鳥浜・仲道Aを取り込んだ総合的な編年案を提示し(大塚1989), さらに仲道A式, 鳥浜下層式設定の必要を述べている(大塚1990)。しかし今もなお研究の焦点は, 井草式の成立の問題にあるといえる。関東地方において, 井草式直前にあたるとされる資料が, 少数ながら認められてきた状況のなかで(高根北遺跡—中山ほか1976, 雨古瀬遺跡—鈴木ほか1976, 布佐余間戸遺跡—高野ほか1981, 山倉大山遺跡—篠原ほか1983, 大丸山遺跡—安岡ほか1977など), 関東地方における井草式の自立的な生成を重視する土肥

孝氏の論考が現れる(土肥1986)。この問題に関連して、井草式と「表裏縄紋土器」との関係を説明することは、前にもまして重要な課題となっている。それは最近の二篇の論文(戸田1988b, 宮崎・金子1989)が、同様なテーマのもとで、対照的な編年論を打ち出したことに象徴的に示されている。「表裏縄紋土器」をすべて井草式より前に位置付ける戸田氏に対し、宮崎・金子両氏は、椈の湖・増野川子石・栃原・石畑などを井草Ⅰ式並行、三枚原などを井草Ⅱ式並行まで下げている。かつて室谷洞窟遺跡が調査され、その成果をうけて井草式が孤高の位置から解かれ、パートナーとなるべき並行土器群の解明に向かうことが予想されながら(山内1969)、現在に至るもまだ議論がわかれていることは、この問題がいかに困難なものであるかを示している。

以上のような現在の研究関心に対し、三の原遺跡の第1群・多縄紋土器の編年的位置を探る試みは、どのように関わるものであろうか。ここで、三の原の資料を基礎に分析を進める際の、筆者の基本的視点を確認しておきたい。

前章で述べた通り、三の原遺跡の第1群2類は鳥浜貝塚の第1群C類に、三の原の3類は同じく鳥浜のE類に、よく類似している。さらに三の原の4類は、椈の湖Ⅱといわれる資料に類似している。この二つの関係を、時間的に非常に近い関係にあるものとする。つまり、三の原2・3類—鳥浜C・E類、三の原4類—椈の湖Ⅱという、東西の並行関係を認めるのである。この立場にたつとき、さらに次の二点が見通しとして得られてくるであろう。

①三の原遺跡は、同じ伊豆半島の大仁町仲道A遺跡に非常に近い距離にあるにもかかわらず、仲道Aではなく、遠方の鳥浜貝塚に類似する資料を出土した。この状況は、鳥浜と仲道Aの間に存在する時間的な差異を証しているものではないだろうか。

②上の二つの並行関係を認めると、東の三の原と、西の鳥浜・椈の湖との中間にあたる、長野県を中心とした分布を示す「表裏縄紋土器群」は、この並行関係からは外れるものとして理解されるのではないだろうか。

この二つの見通しをもって考察を進めるうちに、当然のことながら「表裏縄紋土器群」と井草式との時間的關係の問題に立ち入ることとなる。三の原遺跡の報告書には、三の原2・3類、あるいは4・5類が、1類とした井草式と共伴した可能性がある、という記載をした。この点についても再考することになる。つまりそれは、鳥浜や椈の湖が、井草式と時間的に関わるかどうかという、重要な問題に置き換えられるからである。

まだまだ資料の蓄積が必要な当該時期の研究にとって、新出資料を得たことによって何が判明し、何が問題点として残されるのか、突き詰めておくことは意義あることと思う。上記の視点から、実際に三の原資料と既知の諸資料との比較分析を行なうことを通して、それらの編年的関係について論じていくこととしたい。

#### 4. 「室谷下層式直後、井草式以前」の多縄紋土器編年に関する考察

##### (1) 仲道A遺跡・鳥浜貝塚・室谷下層式との関係

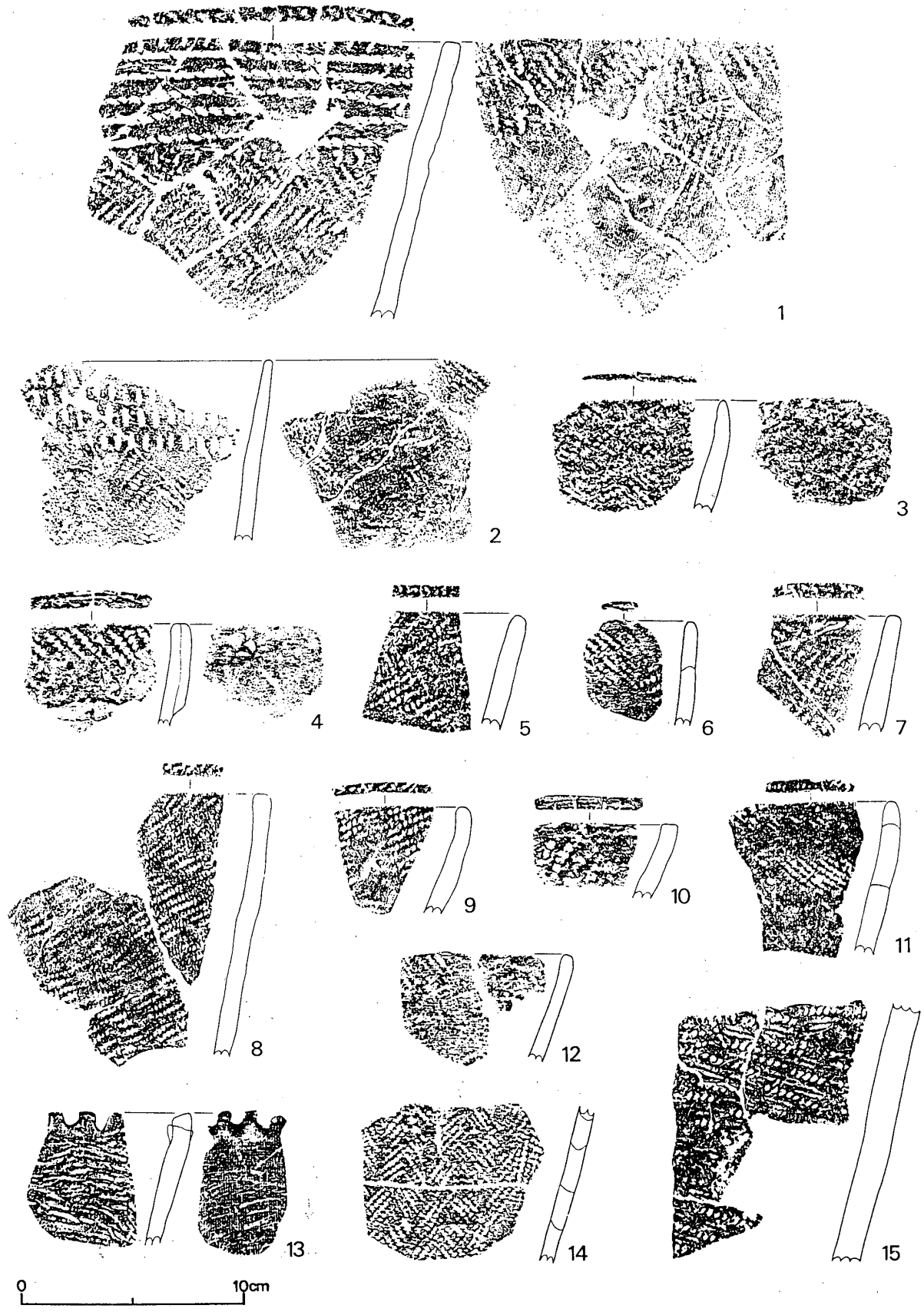
地理的に最も三の原に近い仲道A遺跡の豊富な多縄紋資料については、渋谷昌彦氏が詳細な考察を行ない、大きく三時期に分けている(渋谷1988)。それによれば遺跡の主体となるのは第一期(一ノ沢式並行)・第二期(室谷下層1式並行)で、それらを「仲道A式土器」として新形式を提唱している。渋谷氏が仲道A式の特徴としてあげたのは、自縄自巻圧痕の盛行、それと組み合わせられた撚糸側面圧痕などの押圧手法による装飾であるが、いずれも三の原には皆無である。渋谷氏が仲道A資料の中で比較的新しいとしたのは、室谷下層2式並行として仲道A式から除いた少数の資料である。それらは押圧ではなく回転手法のみで施紋され、正反の合と呼ばれる縄・口縁段帯部・口唇上施紋・胴部の回転縄紋異方向施紋の存在を特徴とする(第7図3~6・9・15などを例示している)。これらの特徴のうち前二者は三の原には無いが、後二者は三の原の3類につながる要素であり、注目される。

この渋谷氏の編年観に対し土肥孝氏は、仲道Aの中には室谷下層式の新しい部分、さらには井草式直前段階の資料も含まれていると指摘している(土肥1988, 第7図4・9・10・13などを例示)。大塚達朗氏は、仲道Aの一部の資料を室谷下層の上層(8層)段階まで下げて理解している(大塚1989, 第7図1・2・4を例示)。筆者もこの両氏の編年観を妥当なものと考えている。渋谷氏が仲道Aの中で比較的新しいとした土器は、直立もしくはやや内湾する口縁部をもち、口唇部を薄く仕上げることはないが、幅のある口唇上に縄紋を施すものが多い。仲道Aの主体となる土器群の時期が三の原とずれることは明白だが、それらの少量の土器が三の原の直前の時期にあたり、両遺跡の時間的つながりを示していると考えerことは妥当であろう。ちなみに、両遺跡の土器ともに多縄紋資料として器厚が厚いことが共通する。また、仲道Aにも繊維を含む土器があり、表裏縄紋施紋の土器もある。

一方、仲道Aとの編年的関係が問題となる鳥浜の資料であるが、1979年以降に報告されたものも含め、主体となる紋様は、地紋としての回転縄紋上の、撚糸側面圧痕紋・先端圧痕紋・自縄自巻圧痕紋などである。また正反の合や羽状縄紋も見られる。このような中で、回転縄紋のみで口縁部紋様を持たない先述のE類は(第5図7~20)、他の類より後出段階のものと考えられた(鳥浜貝塚研究グループ1979)。土肥孝氏は、鳥浜の多縄紋に口縁部紋様帯縮小化の過程をみてとり、やはりE類を新しいと考えた(土肥1982)。のちに宮崎・金子氏の論文は、擬似側面圧痕紋であるC類(第5図1~6)とE類が共伴し、新しくなるという見通しを述べている(宮崎・金子1989)。三の原で、そのC類とE類に類似する資料(三の原第1群2・3類)が出土したことは、それらの見通しが正しかったことを示している。さらに、伊豆地方において仲道A遺跡にはほぼ後続する時期に三の原をおくならば、鳥浜C・E類は仲道Aとは時間的に重ならないことになるであろう。すなわち、鳥浜と仲道Aの多縄紋は、その終末の時期にズレがあるということになる。

では、室谷下層式との関係はどうであろうか。室谷下層の中でも上位層の6~8層では、撚糸圧痕紋や絡条体圧痕紋などの押圧手法はなくなり、わずかに撚紐の先端圧痕を残すのみとなる。そして羽状縄紋によって口縁部に菱形紋様を表現している。やはり紋様装飾が簡素化しているのである。

多縄紋土器編年に関する一考察



第7図 「室谷下層式並行～直後」の多縄紋土器—仲道A遺跡—

三の原には縄紋の押圧手法による紋様は無く、室谷のような整った羽状縄紋も無い。また室谷下層式は、口縁部に段帯部をもち、口縁・底部が隅丸方形となる器形が特徴的である。その口縁段帯部も隅丸の器形も、鳥浜と仲道Aには共に存在している。三の原では口縁部が段状になるものは無く、底部は小型円形である。紋様モチーフ、施紋手法、器形の面から室谷下層式の並行型式の確認が進められる必要があるが(大塚1989, 1990)、三の原の資料がそれに対比されることは無いといえよう。三の原が室谷下層式よりも後の段階に属することは明らかであると考えられる。

(2) 「表裏縄紋土器群」との関係

ここで中部地方の「表裏縄紋土器群」に目を向けてみる。先に述べた通り、三の原2・3類と鳥浜C・E類、三の原4類と椈の湖の類似関係を念頭に置いた場合、地理的に中間に位置する長野県に良好な資料が知られる「表裏縄紋土器群」は、それらの関係には関わらないものとして、時間的に新しく置かれるべきであろう。ここで表裏縄紋土器のまとまった資料としてよく知られる、長野県下伊那郡高森町増野川子石遺跡(酒井ほか1973・酒井1983)、同じく南佐久郡北相木村栃原岩陰遺跡(西沢1982など)、飯山市小佐原遺跡(広瀬1982)、下高井郡木島平村三枚原遺跡(広瀬ほか1977・高橋1982)、群馬県吾妻郡長野原町石畑岩陰遺跡(市1988)の資料をあげてみよう。いずれも外反口縁をもち、丸底をもつとされる土器群である。ただし表裏縄紋の在り方、口縁外反の度合などの面でかなりのバラエティがあり、これらの土器群の中に時期差及び地域差は当然存在する筈である。

「表裏縄紋土器群」を詳細に分析し、地域別を考慮した上で編年を試みた戸田氏の論文では、増野川子石の資料をもとにA類(厚手、くの字状屈曲口縁を特徴とする土器)B類(薄手、外反口縁を特徴とする土器)、同じ伊那谷の上伊那郡宮田村向山遺跡(友野1982・1983)の在り方を加味してB類をさらにB類(裏面全面施文)とB'類(裏面施文が口縁裏に集中)に分け、この分類を表裏縄紋土器分析の基本においた。まず直口口縁の鳥浜と椈の湖をいちおう同時期に並べ、向山遺跡の状況(直口口縁・増野川子石A類・同B類が伴出)から、直口口縁・A類・B類を同時期の所産ととらえ、それぞれ地域的系統が異なるものという解釈をとった。そしてB'類のみ時間的に分離し、その状況は北信地域の二つの遺跡、小佐原(B類主体)→三枚原(B'類主体)に見て取れるとした。そしてこの直後が、室谷上層並行すなわち井草式並行段階になると考えたのである。戸田氏の考えをまとめると、

鳥浜—椈の湖—向山—増野川子石(A類・B類)—小佐原—栃原(主体土器)—大谷寺Ⅲ



三枚原—石畑—宮林Ⅰ群2類f種



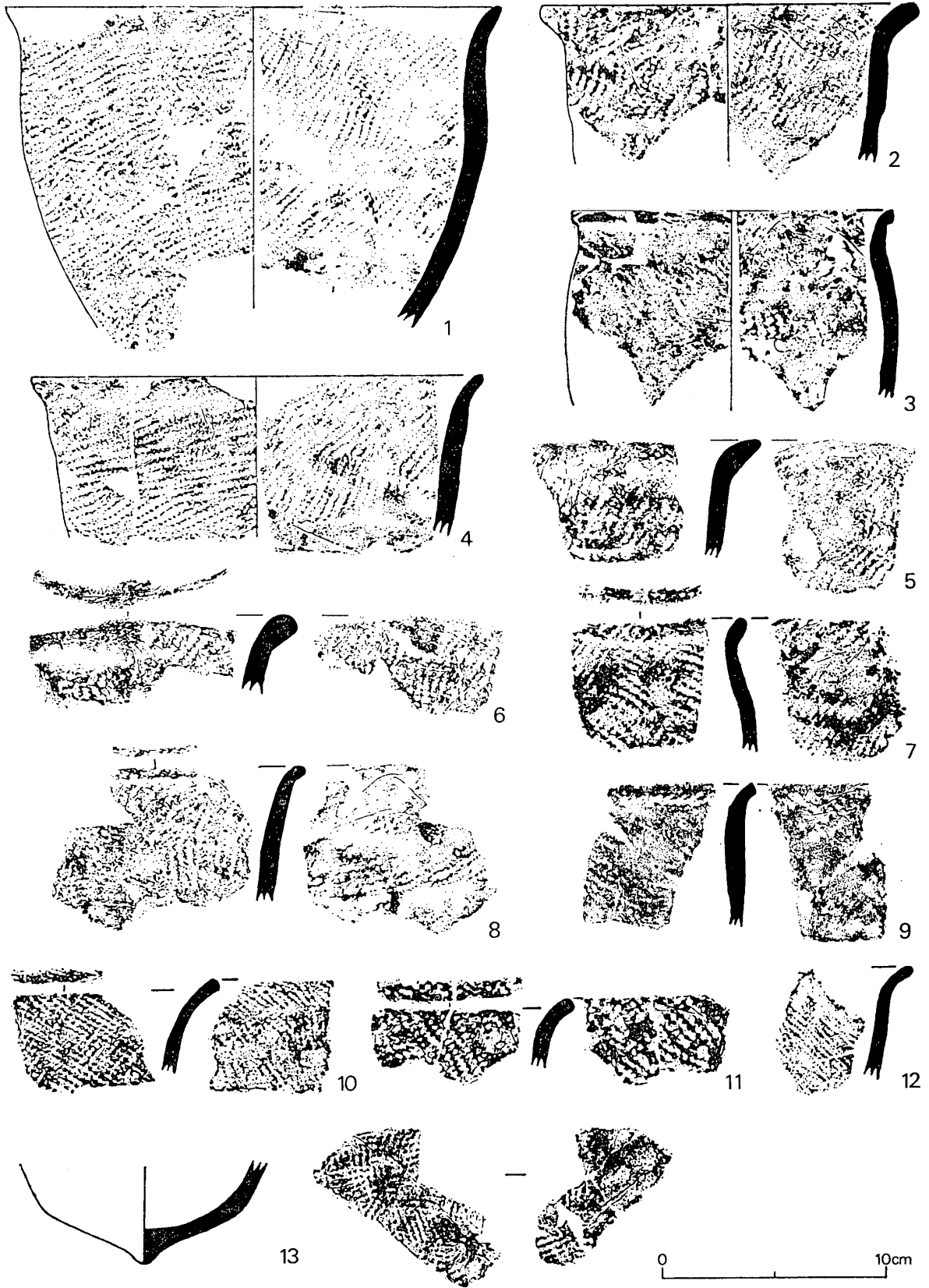
石畑(室谷上層類似土器)

ということになる。

戸田氏の議論は、表裏縄紋土器の口縁部形態・裏面縄紋の在り方という二つの重要な属性に注目



多縄紋土編器年に関する一考察



第8図 「井草Ⅰ式並行」の多縄紋土器—増野川子石遺跡—

し、さらに遺跡での組み合わせを考慮した厳密な方法によるものである。ただしやはり資料的制約は大きく、戸田氏の方法で突き詰めていった結果、増野川子石並行期に多くの遺跡が並ぶこととなった。しかし三の原遺跡の多縄紋資料が出現したことで、これら土器群の編年を考えるための幾つかの視点が得られたことは既に述べた。即ち、鳥浜C・E類—三の原2・3類、椈の湖—三の原4類という、直立口縁土器群の東西の並行関係を認めれば、中部地方の表裏縄紋土器群は、そのホライズンよりは外れて、後出段階に下げられることは間違いないように思われるのである。

この「表裏縄紋土器群」について、筆者は、増野川子石（第8図）・栃原岩陰（第9図）・石畑岩陰（第10図）の三者の共通点を大づかみに把握するべきであると考え。共通点とは、

- ・胴が張る器形
- ・裏面に残る輪積痕・整形痕
- ・口縁部直下に縄の側面圧痕がつけられる土器の存在
- ・口縁部に数箇所つけられる不整形な貼付の存在

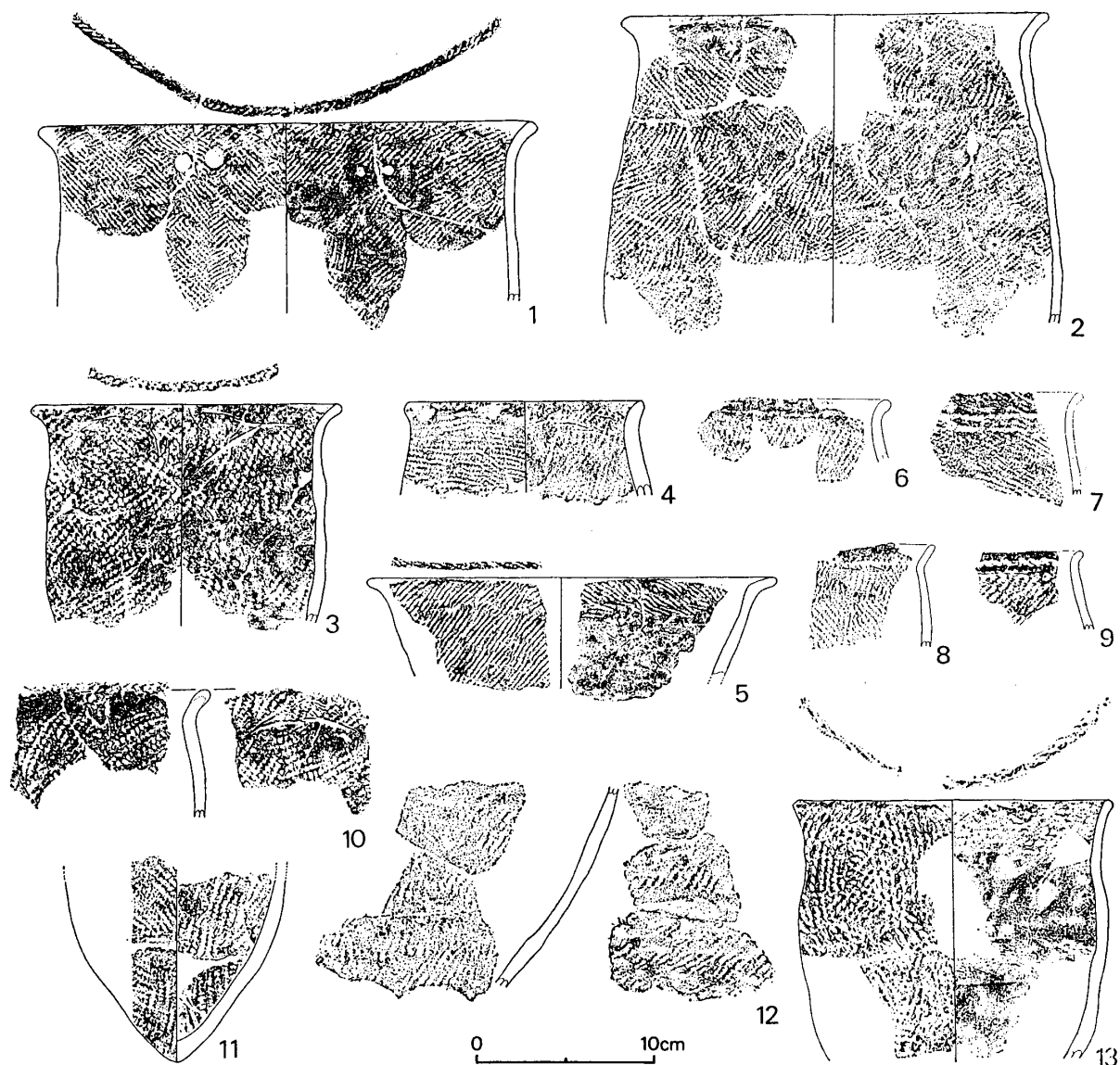
などである。

栃原岩陰は資料数が多く、下層から上層までかなりの時間幅が考えられる土器群であるが、その中でも比較的下層から出土した表裏縄紋および表縄紋の土器は、まとまりのある一群として型式学的特徴を抽出することも可能であると思われる（註6）。石畑岩陰では層位的成果が得られ、下層の表裏縄紋（第10図14）と、その上層の表裏縄紋（第10図1～13）の様相の違いが把握された点が重要である。上層の表裏縄紋及び表縄紋の資料はまとまっており、それらは一見して増野川子石の資料と類似する印象を与えるものであった。なお、石畑岩陰の下層は、椈の湖類似の土器と考えられている（註7）。

三遺跡とも、基本的に胴張りの器形になることは間違いない。実測図では胴が張らない器形に復原されている土器も、実際には胴張りとなることが多い。裏面は輪積痕や、指頭圧痕による器面の凹凸が残る。増野川子石で表裏縄紋の裏面を観察すると、横位施紋された裏面縄紋が、接合面のところの横ナデ整形で消されているものがあつた。栃原岩陰では、接合部分の割れ口にポジ状態の縄紋圧痕が残るものがあつた。つまりそれらの裏面縄紋施紋は、粘土の積み上げのたびごとに行なわれたと考えられるのである。石畑岩陰は、裏面施紋は口縁部に限られるものばかりであるが、第10図4の土器は、やはり裏面縄紋が接合面に沿って横ナデに消されており、増野川子石と同じ状態が見てとれる。この様な、製作と結び付いた裏面施紋法は、三の原でははっきりとは見られなかった方法である。

また、外反する口縁部の何箇所かに、表裏面に被せるように粘土を貼付し、突起状とする癖も共通する。突起と言っても全く不整形な貼付である（栃原の第9図1・10、増野川子石の第8図2・5・6、石畑の第10図1・5にある）。

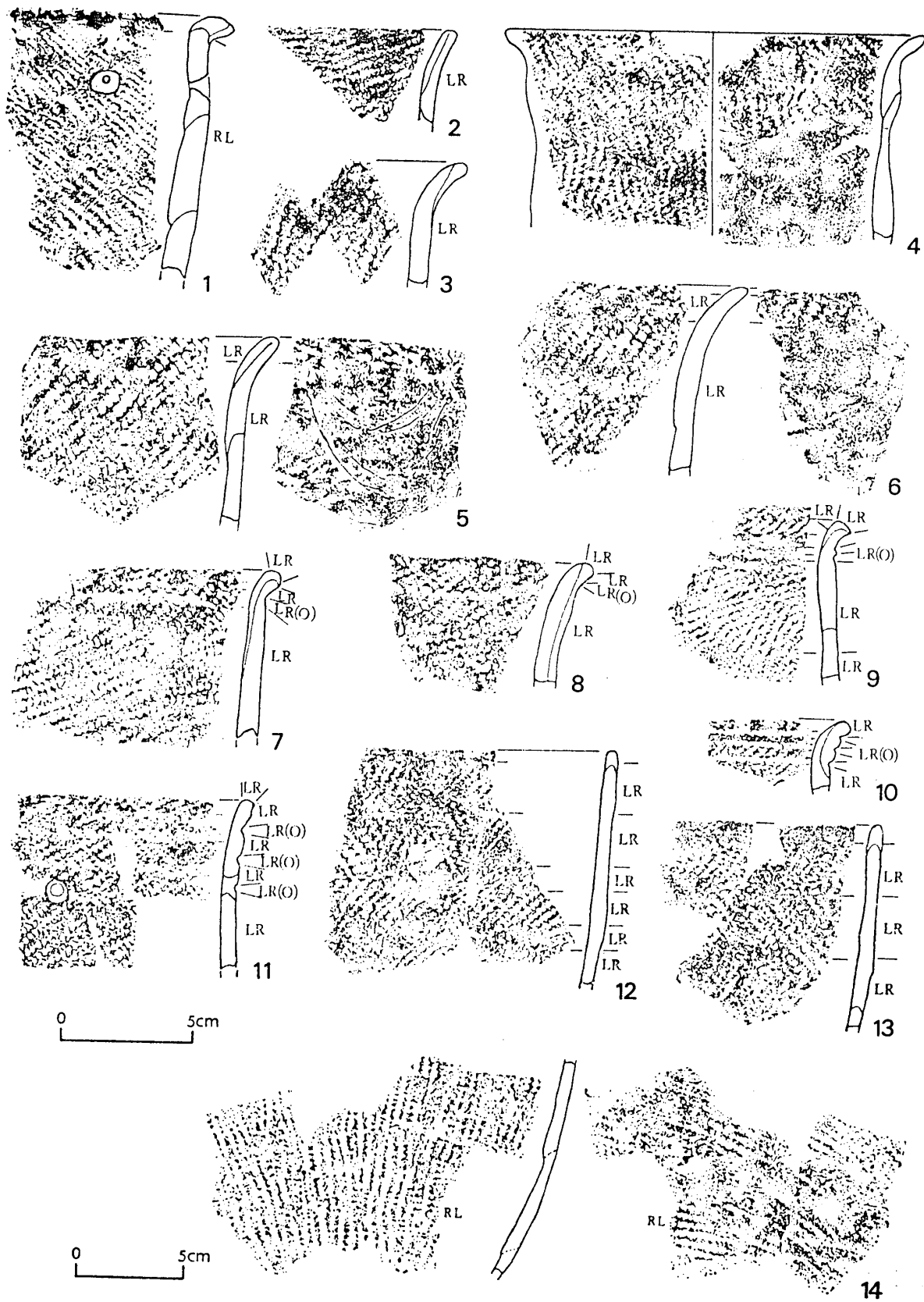
さらに、三遺跡ともに縄の側面圧痕紋をもつ土器が存在することが注意される。栃原岩陰の側面圧痕について宮下健司氏が注意し（埼玉考古シンポジウムでの発言）、戸田氏が室谷上層式との関



第9図 「井草Ⅰ式並行」の多縄紋土器—栃原岩陰遺跡—

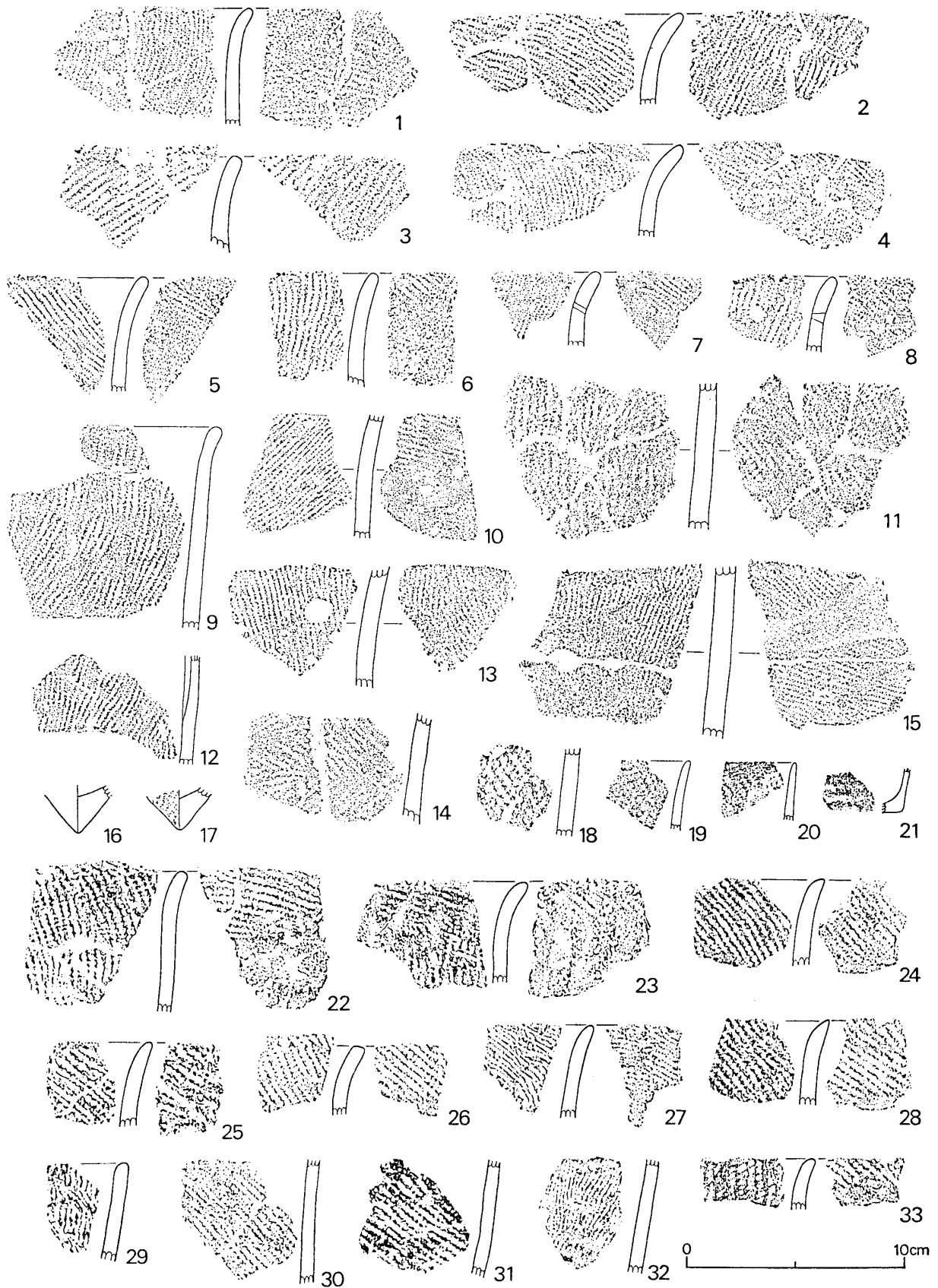
連を示唆したように（戸田1988b），従来からこの側面圧痕は注目されてきた（栃原の第9図6～9，増野川子石の第8図3・4・7・8・9，石畑の第10図7～11）。石畑の側面圧痕土器には二種類あり，ひとつは薄手で，胎土に金雲母を多く含み，黒味があった色調を示し，口縁直下に1条もしくは2条以上の線状の側面圧痕を持つものである（第10図9～11）。この土器は裏面に縄紋を持たない。栃原の第9図6～9がこの類例に当たる。もう一種類は，特に薄手ということはなく，胎土も他の土器と変わるところなく，外反口縁部直下のくびれ部分に1条の側面圧痕をめぐらすものである（第10図7・8）。これらは裏面縄紋を持つものと持たないものがある。増野川子石の側面圧痕はすべてこの種類で，図示されていないが栃原にもあった。

この側面圧痕は，やはり室谷上層の側面圧痕に結び付けてよいものと思われる。室谷上層出土の，口縁に並行して2条の側面圧痕紋が周回するものは，薄手で，金雲母を含む灰褐色の硬質な胎土を



第10図 「井草 I 式並行」の多縄紋土器—石畑岩陰遺跡—

多縄紋土器編年に関する一考察

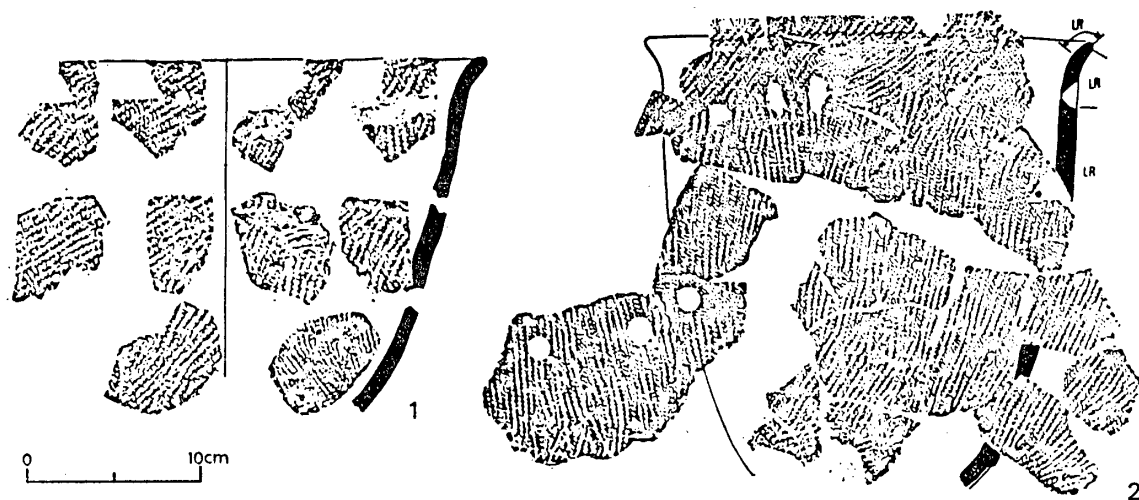


第11図 「井草Ⅰ式並行」の多縄紋土器—小佐原遺跡（1～21）・三枚原遺跡（22～33）—

もち、非常に細かい地紋縄紋の上に、おそらくは同じ原体の側面を押圧したものである。やはり口縁部がやや外反し、胴部は張り出していたらしい。これらの特徴は、石畑や栃原で見られた側面圧痕の土器に、非常に近いものである。口縁部がわずかに上下に波打つような特徴も共通する。

上に述べた幾つの特徴をもって、「表裏縄紋土器群」のなかで増野川子石—栃原—石畑というラインを、大雑把ではあるが並行関係と認めることはできるのではないかと思う。そして当然、それらは先に筆者が提示した二つの関係、鳥浜C・E類—三の原2・3類、椈の湖—三の原4類とは、隔たりの大きいものと言わねばならない。また、栃原や石畑の土器群の中に、室谷上層の土器に関係づけられるものが含まれる点は重要である。室谷上層が関東の井草式以降に対比されることを想起すれば、増野川子石並行期の編年的位置もおのずから示唆されるからである。

北信濃の二つの遺跡、小佐原遺跡(第11図1~21)・三枚原遺跡(第11図22~33)は、上記の特徴を全く持たないので、増野川子石並行期には関わらない、時期の異なる資料であると考えられる。注意すべきは、いずれもほぼ直立してきた胴部を、口縁下2~3cmで若干外に反らせたといった感じの作りの口縁部形態を示すことである。さらに、小佐原の資料の中に、口縁部下1.5cmほどの位置に小さな焼成前穿孔が見られることが注意される(第11図7・8)。この焼成前穿孔は、堀内・宮下氏によって山梨県仲大地遺跡資料との類似が注意された(堀内・宮下1982)。両氏によれば、仲大地で焼成前穿孔があるのは外反口縁をもつ表裏縄紋の土器(第12図1)で、裏面縄紋は底部近くまで施紋される。この遺跡には他に井草I式土器があり(第12図2)、肥厚せずに外反する口縁下に幅4cmほど縄紋LRを斜行させ、以下の胴部は同一原体による縄紋を縦走させ、口唇端部と口縁裏面にも幅狭い縄紋施紋がある。宮下氏等の指摘が正しければ、仲大地遺跡を介して、間接的に小佐原・三枚原を井草I式に結びつけることが可能となる(註8)。ただし、やはり井草式以降に位置すると思われる増野川子石並行期との先後関係は、今のところはっきりしない(註9)。近接する二遺跡の違い、つまり小佐原は裏面縄紋が胴部下半にまで及ぶものが多く、三枚原は口縁部裏に限られるという違いを強調するには(戸田1988b)、やや資料的に貧弱であると思われる。



第12図 井草I式土器及び「井草I式並行」の多縄紋土器—仲大地遺跡—

ここでは、小佐原・三枚原をほぼ一つの段階としてとらえ、それらが井草Ⅰ式に並行する可能性について言及しておきたい。

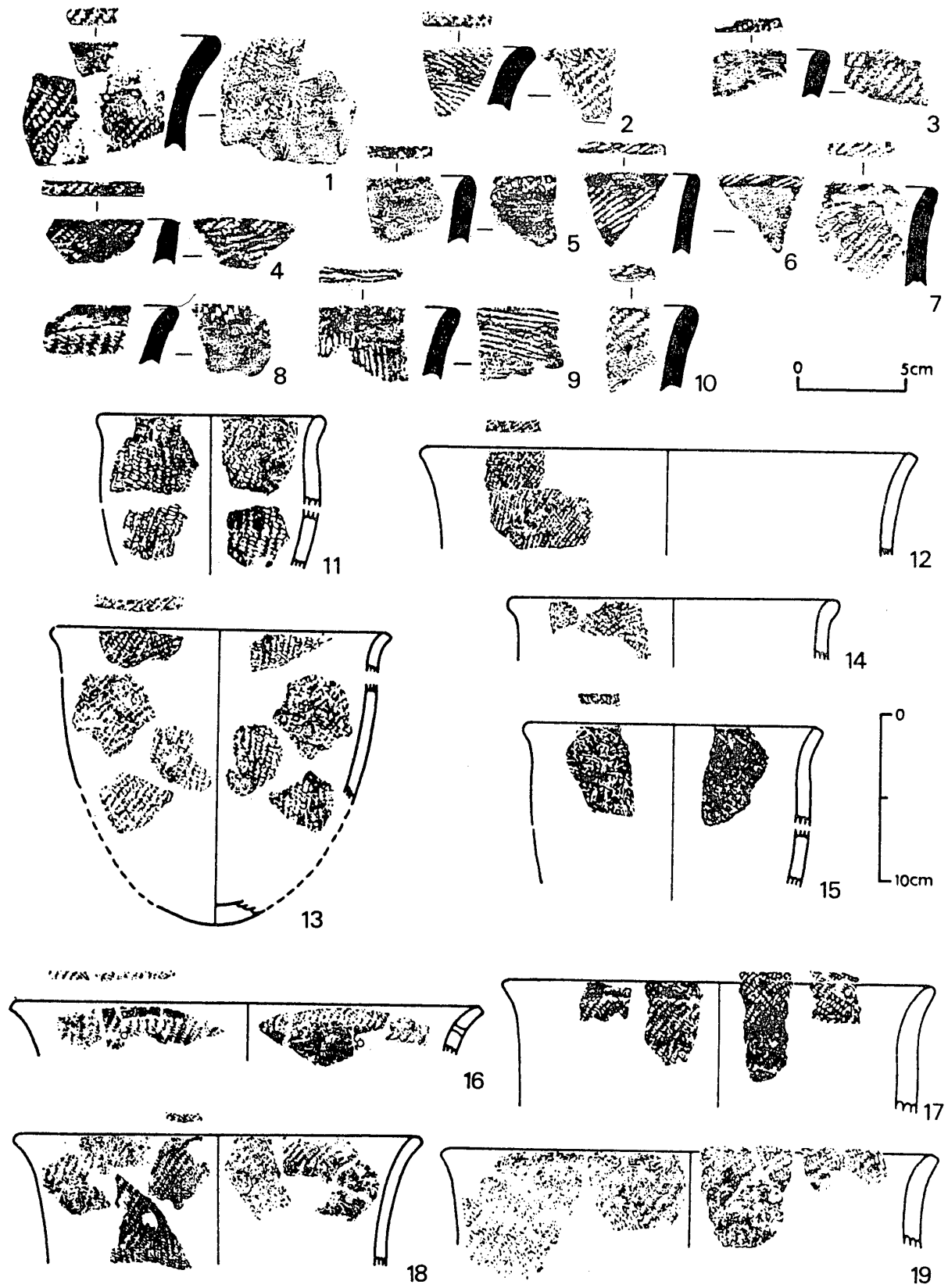
### (3) 若宮遺跡との関係

駿豆地域には仲道A遺跡・三の原遺跡の他にもう一つ、多縄紋のまとまった資料を出した富士宮市若宮遺跡がある(馬飼野ほか1983)。のちに関野哲夫氏が押型紋出現の問題を中心に若宮資料に再検討を加えている(関野1988)。若宮遺跡第Ⅰ群(第13図11~15)は、表裏縄紋および表縄紋を一括したもので、金雲母を含む脆弱な胎土が多いため器形を復原しにくい、外反口縁を有し、裏面施紋が胴部下位に及んでいる。LRの横位回転が主体であるが、回転方向は一定していない。口唇上には施紋するものとししないものがある。輪積痕や指頭圧痕がよく残っている。一方、若宮第Ⅱ群(縄文土器)1類とされた土器群(第13図16~19)は、非常に斉一的な特徴を持つものである。外反口縁で、口唇部上から口縁内面にかけて縄紋を施紋する。つまり裏面縄紋は口縁部に限られる。表面は、口縁部下に無紋部を残し、以下にLR主体の縄紋を施紋するが、その時に、無紋部との境に原体末端を意識的に表現していることが顕著な特徴である。無紋部の幅は様々だが、広い無紋部に、口縁を外反させた際についたと思われる、指頭圧痕のへこみがある土器もある。ただし、裏面は平滑に整えられていることに注意すべきである。現在知られる所の「表裏縄紋土器群」は、裏面に輪積痕や指頭圧痕を残すことを通例とするが、若宮第Ⅱ群1類はその基本的性格を欠如しているのである。

若宮の二種類の多縄紋土器群は、いずれも三の原遺跡との差が大きく、三の原より後出のものと考えられよう。若宮第Ⅰ群は前節でみた「表裏縄紋土器群」の間ではあるが、断片的な資料で特徴が抽出しにくい。一方、斉一的な特徴でまとめられる若宮第Ⅱ群1類も、類例が求めにくい。裏面の在り方からすれば、大方の「表裏縄紋土器群」より新しい時期の所産と考えられる。鎌倉市大船山居遺跡の拓影図の中に(原ほか1967)、若宮と同様縄紋原体末端がきれいに出ており、裏面施紋が口縁部に限られる資料がある(第13図8)。実見していないので何とも言えないが、戸田氏が井草式直前段階の典型例として重視している山居遺跡の資料の一部が、若宮第Ⅱ群1類の類例である可能性を指摘しておきたい。なお、この若宮第Ⅱ群1類は、紋様構成上、井草Ⅱ式に近いと考えることはできないであろうか。井草Ⅱ式に関する記述、たとえば「口縁の外側部やその上部に縄文がかけられている。口縁外反部から頸部にかけて、1~3種の無文帯が見られ、その口縁外反部際には、指で押したへこみの跡が顕著にまたかすかに認められるものがある。その下の無文帯は、へらか指で撫でた修正の擦痕文が水平に走っている。そうした無文帯の下に縦位に縄文が施されている。」(西村1965)という文章は、そのまま若宮第Ⅱ群1類の特徴に通じるものと考えられないであろうか。

### (4) 井草式との関係

三の原遺跡においては、1類とした井草式と2~4類の多縄紋の時間的關係については、直接的な証拠に恵まれなかった。しかし、前節までの議論の中にしばしば井草式が登場したように、幾つ



第13図 「井草Ⅰ式～Ⅱ式並行」の多縄紋土器—大船山居遺跡（1～10）・若宮遺跡（11～19）—



かの間接的なヒントは得られているはずである。

三の原の井草式は、井草Ⅰ式のなかでも最古段階ではないもの、と言えよう。北総台地の井草式を細分した篠原正氏の案に従うならば（篠原1979, 1980）「井草Ⅰc式」にあたるものである（註10）。隣接する神奈川県を見ると、横須賀市平根山遺跡の最下層（岡本1958）、井草Ⅰ式の単純遺跡と評価された（戸田1988b）横浜市大楽谷遺跡（平子・石森ほか1985）の資料が、同じ段階に属するものと思われる。

この井草式と「表裏縄紋土器群」の関係について、常に問題となるのは、井草式が主体的に分布する地域で、両者が明確に共伴する事例がないことである。同じ遺跡から両者を出土した例として、大谷寺洞窟遺跡、埼玉県橋立岩陰遺跡（芹沢・吉田ほか1967）、仲大地遺跡、そして三の原遺跡などが知られるが、いずれも関東縁辺部の遺跡であるし、大谷寺は層位的出土例、他の遺跡も厳密な共伴性は証明されない。ただし関東地方でも、最近報告された多摩ニュータウン No. 105 B遺跡では、井草式の破片に、外反口縁をもち裏面縄紋が胴部まで及ぶ表裏縄紋土器の破片が伴ない、両者の関連が考えられるとされた（川崎ほか1990）。このような例は非常に稀であることは間違いない。

この問題は、一面では、井草式とは何か、井草式の最古式をいかに認識するかという問題と関わると思う。井草Ⅰ式を出した複数の遺跡、東京都多摩ニュータウン No. 52 遺跡（小林1966）、千葉県西の台遺跡（高橋ほか1985）、高根北遺跡（中山ほか1976）、雨古瀬遺跡（鈴木ほか1976）、新東京国際空港 No. 7 遺跡（西川ほか1984）などでは、典型的な井草式の範疇には入らない土器の存在が知られる。たとえば多摩ニュータウン No. 52 遺跡でJ型a類とされた土器群の中には、紋様やその構成、胎土からも確かに異質な土器があり（報告書の9・14・15）、それと違う種類ではあるが、やはり異質な土器は多摩ニュータウン No. 99 遺跡にも見られる（可児1968報告書の第49図13・15）。それらの土器に注目して厳密に整理していけば、見方によっては、井草式土器と他地域の土器との関係を知る手掛かりは既に得られているということにもなろう（註11）。

先に筆者は、増野川子石並行期に関して、室谷上層土器群すなわち井草Ⅰ式以降との関連を想定した。また、小佐原・三枚原についても、仲大地を通して井草Ⅰ式に結びつけられる可能性を述べた。結果として、「表裏縄紋土器群」の側から、井草Ⅰ式の細分の問題を提起したことになる。

井草式の編年については、まず西ノ城貝塚において示された井草Ⅰ式→井草Ⅱ式の層位的区分（西村・芹沢ほか1955, 西村1965）、夏島貝塚における井草Ⅱ式の単純層の存在（杉原・芹沢1957）が基準となる。その井草Ⅰ式は、西ノ城（西村1965）や馬の背山（岡本1959）、多摩ニュータウン No. 52（小林1966）などで、口縁部に撚糸圧痕紋などの撚糸施紋をもつもの、また口唇部の肥厚・外反の著しいものが、より古相を示すものとして注目された。ただし井草式の細分については、北総台地における篠原正氏の分類の成果（篠原1979, 1980）を重視するべきであると考えている。先述の篠原氏の井草Ⅰc式は、南関東で単純な様相を示す大楽谷遺跡と並行関係に置かれることは明らかであり、これらのいわば典型的な井草Ⅰ式の段階を認めることは容易であると思う。それを井草Ⅰ式の新段階とすれば、それより古相を示すと考えられてきた、西ノ城や馬の背山の撚糸施紋の

土器、多摩ニュータウン No. 52 遺跡で J 型 a 類とされた土器、北総台地で篠原氏が井草 1 a・1 b 式とした高根北や榎峠（鈴木ほか1974）の一部土器などは、井草 I 式の古段階と位置づけられる。井草 I 式の細分の問題については、現時点では筆者は以上のような見通しをもっている。

三の原遺跡の井草式と他の多縄紋土器の問題に戻れば、増野川子石並行期ならびに小佐原・三枚原の時期を井草 I 式並行とした一方、それらの「表裏縄紋土器群」を、三の原 2・3 類一鳥浜 C・E 類、三の原 4 類一椀の湖 II という並行関係より新しいものと考えたことからすれば、三の原 2～4 類の多縄紋土器には、井草 I 式よりも古い、という位置付けを与えておくのが妥当だということになる。

三の原 2・3 類、そして 4 類は、室谷下層式よりも新しい、という位置付けは既に得られている。するとそれらは、「室谷下層式後、井草式前」という時期幅に、おさまってくるという見通しが得られる。

#### (5) 大谷寺洞窟との関係

それでは、山内清男氏が井草式前においた栃木県大谷寺洞窟と、三の原遺跡との関係はいかがであろうか。山内氏は、のちに大谷寺 III 式といわれた表裏縄紋・表縄紋の土器（埴1976）を、椀の湖 II 類似と考えた（山内1969）。近年、宮崎・金子両氏の論文の中で初めて大谷寺 III 式の一部が資料化された（宮崎・金子1989）。それによれば、口縁部は大部分が内湾気味に立ち、口唇部は先細り状と角頭状を呈するものがある。この口縁部の特徴は直立口縁の鳥浜、椀の湖、仲道 A、そして三の原にも通じるものである。器形は平底で、底部、口縁部ともに隅丸方形もしくは隅丸方形に近い円形を呈する。この隅丸方形という特徴は、周知の通り室谷下層土器群や鳥浜、仲道 A には顕著であるが、三の原と椀の湖には明瞭には認められないものである。また、大谷寺の胴下半部破片は、接合部で器形が屈曲する例が多い。この屈曲は、室谷下層土器群と鳥浜には見られたが、三の原と椀の湖にはない。大谷寺には紋様装飾のある土器は少なく、回転縄紋が卓越するが、この特徴は三の原や椀の湖と似るし、室谷下層、鳥浜、仲道 A のいずれも新しい部分は類似の特徴を持つと考えられる。さらに、「正反の合」の縄は大谷寺、室谷下層土器群、鳥浜、仲道 A にはあるが、三の原、椀の湖にはない。なお、室谷下層の特徴である口縁段帯部は、大谷寺には見られない。

以上のように、今まで見てきた資料と大谷寺洞窟の資料を大雑把に比較してみると、室谷下層式とそれに並行する鳥浜・仲道 A と、それらより後出段階の三の原・鳥浜（C・E 類）・椀の湖と、ちょうど両者の特徴を併せ持つ中間的な様相を大谷寺洞窟資料に見てとれることがわかる。大谷寺 III 式といわれる表裏縄紋を含む土器群は、「室谷下層式直後」に位置するが、しかし三の原 2・3 類一鳥浜 C・E 類、三の原 4 類一椀の湖 II の段階よりは、微妙に古くなるものと考えられる。なお鳥浜と仲道 A の中には、この大谷寺 III 式と並行する部分が含まれていよう。とにかく、室谷下層式と鳥浜、仲道 A の編年対比が必要である。室谷下層段階の様相がとらえられてはじめて、室谷下層式直後の議論の筋道もはっきりするからである。

(6) 「室谷下層式直後、井草式以前」の多縄紋土器の編年

筆者は、三の原遺跡と西の二つの遺跡、鳥浜貝塚と椀の湖遺跡を結び付けることを通して、幾つかの並行関係を想定してみた。そして、それらをできるだけ関東の井草式に引きつける形で、編年の位置を論じてきた。それを整理してみると、次のようになる。

近畿	中部	東海
鳥浜第1群C・E類	……………	三の原第1群2・3類
椀の湖Ⅱ	…………… 石畑岩陰下層	…………… 三の原第1群4類
小佐原・三枚原	…………… 仲大地	
増野川子石…栃原岩陰…石畑岩陰上層		
		若宮第Ⅱ群1類

そして小佐原・三枚原並行期と増野川子石並行期はそれぞれ井草Ⅰ式に、若宮第Ⅱ群1類は大船山居遺跡の一部とともにより新しく、井草Ⅱ式並行に置かれることであろう。井草Ⅰ式は、既に述べたように、古・新二段階に分けて理解されると考えている。

若干の補足説明をしなければならない。筆者が想定した上の並行関係は、三の原の2・3類と4類の段階については連続的なものと考えているが、他の関係がヒアタスなく時間的に継起したものであるとは、今のところ断言できない。また、現在知られる資料を、幾つかの属性に注目して、かなり大雑把にとらえていったので、各々の並行関係の根拠はまだまだ貧弱であると認めざるを得ない。さらに、増野川子石並行期と小佐原・三枚原並行期の厳密な先後関係は、現状では把握できていないため、井草Ⅰ式の古・新二段階細分との対比に曖昧さが残る。

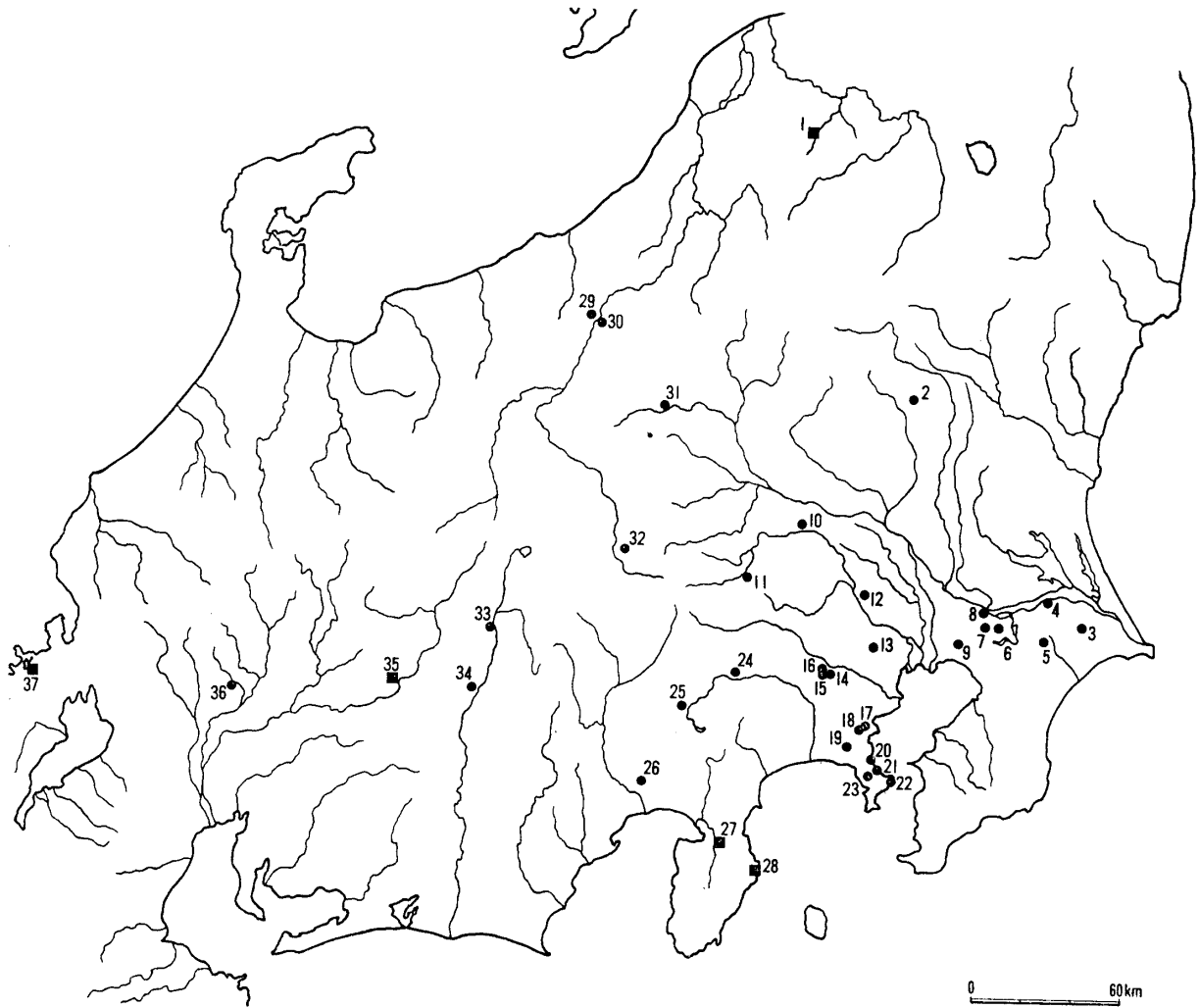
三の原2・3類—鳥浜C・E類、三の原4類—椀の湖Ⅱというホライズンは、室谷下層式直後、井草式直前という幅の中に位置付けられるという結論に落ち着いたが、しかしその幅の中には少なくとももう一つ、三の原の直前に、大谷寺Ⅲ式の段階が入るのではないかと考えている。室谷下層式と井草式の間時間的懸隔は、これらの遺跡の資料によって埋められるのではないと思われる。しかしやはり、それらは関東地方における井草Ⅰ式の成立を直接的に説明しているとは言えない。相変わらずこの課題は残されていると言わざるを得ないが、井草式直前の様相が関東より西の多縄紋資料、すなわち三の原や椀の湖、鳥浜で明らかになってきたことの意味は十分に考慮されなければならない(註12)。井草式成立に関わる西からの要素に、より注目する必要があるだろう。

結果的に、外反口縁をもつ「表裏縄紋土器群」を、関東の井草Ⅰ式以降に対比させることとなった(註13)。最後に、三の原遺跡の多縄紋土器の中にあっては稀少な存在であった第1群5類、すなわち外反口縁をもつ破片(第4図1~3)について触れよう。これは三の原2・3類、4類の直立口縁より後出の段階と考えられ、その意味で三の原と、外反口縁の「表裏縄紋土器群」とを時間的に結ぶ貴重な存在と言える。断片的な資料から多くのことは語れないが、三の原遺跡の中で井草Ⅰ式に共伴した可能性が高いのは、この外反口縁の5類であるといえよう。

## 5. 結 語

三の原遺跡から得られた多縄紋土器群の編年の位置を再考することを契機として、かなり広範に関連資料の分析検討をおこなってきた。三の原遺跡の資料を新たに視野に入れることで、「室谷下層式直後、井草式以前」の多縄紋土器編年に関する、幾つかの重要な知見を加えることができたと思う。ここにこの論文で筆者が論じたことを要約し、結語としたい。

1. 静岡県伊東市三の原遺跡からは、表裏縄紋を含む相当量の多縄紋土器が出土した。筆者はそれ



第14図 文中で言及した遺跡の分布図

1. 室谷 2. 大谷寺 3. 山倉大山 4. 西ノ城 5. 新東京国際空港 No. 7 6. 雨古瀬 7. 高根北  
8. 布佐余間戸 9. 西の台 10. 宮林 11. 橋立 12. 大丸山 13. 井草 14. 多摩ニュータウン No. 52  
15. 多摩ニュータウンNo.99 16. 多摩ニュータウン No.105B 17. 大丸 18. 大楽谷 19. 山居 20. 夏島  
21. 平坂 22. 平根山 23. 馬の背山 24. 仲大地 25. 池ノ元 26. 若宮 27. 仲道A 28. 三の原  
29. 小佐原 30. 三枚原 31. 石畑 32. 栃原 33. 向山 34. 増野川子石 35. 柁の湖 36. 九合  
37. 鳥浜  
(■は筆者の分析の中で特に重視した遺跡)

を、井草Ⅰ式を含めて第1群（多縄紋の土器）とし、1～6類に分類した。このうち遺跡の主体となる直立口縁の土器群（2～4類）について、2・3類→4類という型式学的な変化を想定した。この2・3類、4類の類似資料が、遠方の鳥浜貝塚と椈の湖遺跡に求められたことが、本論文の問題意識の発端となった。

2. 三の原遺跡において、同じ伊豆半島の近隣の仲道A遺跡ではなく、遠方の鳥浜貝塚に類似する資料が発見されたことは、注目される。この三の原と鳥浜の関連性が、多くの問題を投げかけられると思われるからである。まず、鳥浜と仲道Aの多縄紋資料は、ほぼ室谷下層式に対比されるものと考えられてきたが、鳥浜の多縄紋資料の一部（C・E類）が、仲道Aより新しい段階まで下がること示された点が重要である。一方で三の原資料は、仲道Aと室谷下層式とは時間的に関わらないとするのが妥当であろう。

3. 筆者は三の原2・3類—鳥浜C・E類、三の原4類—椈の湖Ⅱという東西の並行関係を認めたが、その関係は中部地方の「表裏縄紋土器群」についても重要な問題提起を行なう。すなわち、この東西の並行関係から見れば、その中間にあたる長野県域を中心に分布する「表裏縄紋土器群」は、その並行関係から外れて後出段階に置かれるべきであろう。この「表裏縄紋土器群」について、増野川子石遺跡—栃原岩陰遺跡—石畑岩陰遺跡をほぼ並行関係として、室谷上層土器を通じて井草Ⅰ式に結び付け、同じく小佐原遺跡・三枚原遺跡を、仲大地遺跡を介して井草Ⅰ式に対比する編年案を提示した。結果的に、中部の「表裏縄紋土器群」の側から、井草Ⅰ式の細分の問題を提起したことになるが、この点について筆者は、井草Ⅰ式を古段階と新段階に分けて考えている。なお井草式と「表裏縄紋土器群」の並行関係を見ていくためには、何をもって井草式とし、何をもって最古の井草式とするかという問題を、突き詰めて考える必要がある。そのような厳密な見方を適用して、関東の井草Ⅰ式を出す遺跡の資料内容を検討することによって、両者の関係はより明確にできると考えている。

4. 駿豆地方で注目すべき多縄紋資料である若宮遺跡第Ⅱ群1類については、大船山居遺跡の一部資料と共に、井草Ⅱ式との関係を考えた。つまり関東以西の多縄紋土器の中には、井草Ⅱ式並行まで新しくなる土器が存在すると考えるのである。

5. 関連資料を比較検討していった結果、三の原2・3類—鳥浜C・E類、三の原4類—椈の湖Ⅱという関係は、「室谷下層式直後、井草式直前」という幅の中に編年的位置を求められるという結論に達した（註14）。大谷寺Ⅲ式も同じ幅の中で、三の原の直前に置かれるべきであろう。すなわち、室谷下層式と井草式は時間的に直接つながるものではなく、その懸隔は以上のような資料で埋められると考えられる。鳥浜と椈の湖が井草式直前段階に置かれたこと、とりわけ鳥浜の多縄紋資料の中に、室谷下層式や仲道Aより新しい、井草式直前にあたる資料の存在を認めた点は重要である。井草式直前段階が、むしろ西の状況から把握されることが示された結果、今後は西の多縄紋が井草式成立にいかに関与したかを考慮する必要がでてきた。このように、「室谷下層式直後、井草式以前」という議論の多い時期に関して、関東から近畿までを含む広範な地域の多縄紋土器群の編

年的関係を見直す機縁をもたらしたことは、三の原遺跡出土の多縄紋資料の大きな意義であったと言えることができよう。

最後に、当該期の編年研究の今後の課題について、二つの点を付け加えておきたい。何よりも、井草式を含めた当該期の多縄紋土器全体を通観できるような、より構造的な土器の見方を導入する必要が感じられる。筆者の今回の分析は、実際の資料に即して、細かく属性の異同を見ることを方法の中心とした。しかし、ミクロな属性の比較を積み上げることも大切だが、土器群全体を一つの基準から見渡すことができるような視点があるはずである。その視点から見たとき、井草式とは何か、「表裏縄紋土器群」とは何か、あるいは両者の関係性はいかなるものかといった問題が、より鮮明に見えることとなろう。

筆者は、「表裏縄紋土器群」を括弧付きで表記してきた。今までの研究の中で、確かに実体のある土器群を指して使用されてきたこの便利な用語を、今後はより厳密に規定して使用する必要があらう。室谷洞窟の最下層にも表裏縄紋施紋の土器はあり、押型紋出現に関わる時期の縄紋土器の口縁部裏にも帯状の施紋があるという状況の中では、何を「表裏縄紋土器群」に含めるかによって、議論に食い違いが生じる可能性が大きいからである。

以上のようにこの論文の内容は、新出資料を既出資料と比較検討することを通じて、土器編年上の問題を提起したものである。型式学的にかなり強引な議論をした部分も多く、資料の増加を待って再検討されるべきであらう。この論文が今後の議論の一つの叩き台となることを願いたい。厳しい御批判や御教示をいただければ幸いである。

三の原遺跡の調査から本論文執筆に至るまで、立教大学関係の以下の各位には大変にお世話になった。香原志勢・山浦清・小西正捷・鈴木正男・武井則道・川名広文・小磯学・森田康志・小倉均・野内秀明・佐々木陽子。また、本論文の草案を阿佐ヶ谷先史考古学研究会にて発表した折に、以下の皆様から有益な御教示や御意見をうかがうことができた。岡本東三・戸田哲也・篠原正・関野哲夫・柳沢清一・鷹野光行・武藤康弘・山村貴輝。また、次の方々には資料閲覧・文献探索等でお世話になったり、貴重な御意見をうかがったりした。石井寛・宮崎朝雄・金子直行・宮井英一・吉田格・土井悦枝・可児通宏・原川雄二・新井和之・宮重行・上守秀明・千葉寛・峰村篤・佐藤武雄・網谷克彦・西沢寿晃・宮下健司・広瀬昭弘・吉原佳市・友野良一・小池孝・原寛・巾隆之・漆畑稔・馬飼野行雄・山上英誉・池谷信之・池谷初恵・駒形敏朗・小熊博史・塚本帥也・原田昌幸・谷口康浩・中山真治・小野正文・古谷健一郎・小西直樹・小泉龍人・千代延恵正。また、筆者の所属する東京大学考古学研究室関係の方々には日頃から御指導をいただいているが、特に次の方々からは本論文執筆について多大な助言を得た。上野佳也・藤本強・今村啓爾・安斎正人・大塚達朗・鈴木美保。以上の皆様には心から感謝している。紙上を借りて御礼申し上げたい。

(1991. 11. 18脱稿)

## 註

- 1) 井草式並行の中部地方の土器を確認し、編年上の空白を埋めていくことは、必須の課題であると言える。それによって初めて、関東と中部の文化内容を比較することができるようになり、また押型紋土器の出現に関する議論も具体的なものとなる。それらはもちろん草創期と早期の区分の問題に通じることとなる。筆者は、関東地方のいわゆる捺糸紋土器群を、草創期とする立場をとっている。本稿のテーマと関連するが、現在もなお他地域の並行土器群が明らかになったとは言えない井草Ⅰ式をもって、早期の開始とすることに躊躇を感じるのである。山内清男氏の言にある様に、細別を進行させ、それを知悉した後に、便宜的に設定されるべき大別の区分に想倒すればよいであろう（山内1937, 1939補註19）。また、捺糸紋土器群の時期に新たに出現する文化要素に注目することは確かに重要であるが、それと年代学上の尺度の問題とは別であると考えている。
- 2) 「多縄紋」という用語は、縄紋原体の押捺・回転手法による紋様をもつ草創期の土器群に対する呼称として定着している。三の原の土器も、この草創期の多縄紋土器の仲間として報告したわけであるが、ここで「井草式」を「多縄紋」に含めたことは、非常識な分類と受けとめられるかもしれない。周知の通り井草式は、戦前の発見（矢島1942）のあと現在に至るまで、捺糸文土器、捺糸文系土器、あるいは捺糸文系土器様式という枠組みの中でとらえられ、その最初の段階を占めるものとして編年の位置が確定している。井草式が捺糸紋土器群の一部として把握されてきたことは、研究史の中でごく当然のことであったと思われるし（芹沢1947, 1951, 芹沢・岡本1953, 岡本1953など）、最近もこの枠組みに関して包括的な記述を行なった原田氏の著作が出ている（原田1991）。筆者も全くその分類に反対するものではない。ただし、三の原遺跡において、相当量の捺糸紋の土器を第2群としてまとめたにも関わらず、井草式をことさらに第1群に含めたのには理由がある。三の原の井草式は胎土も色調も捺糸紋の土器とは異なる一方、多縄紋土器の中に在れば違和感を感じさせないほど類似していたため、資料整理の過程から、多縄紋の仲間として分類し扱っていた。そして整理の進行とともに、三の原の井草式は時期的には第2群の捺糸紋土器とヒアタスのあるものと考えられ、むしろ多縄紋の時期に近いものとして、それらと共に考察の対象とする必要を感じた。そのような状況の中で、三の原遺跡においては、井草式を多縄紋の一部として考えることを試みたのである。さらに言えば、今もなお関東地方という局部的地域に編年の的に突出している感のある井草式を、周囲の地域に展開する土器群と対比させていくために、この様な分類の仕方も有効になるのではないかと考えている。現時点では、多縄紋土器と捺糸紋土器群を別物とは考えないで、大きく一つに括るのにやぶさかではないという山田昌久氏の意見が、最も的を得たものではないかと思っている（山田1988）。
- 3) 柘の湖遺跡と同じ岐阜県の九合洞窟にも表裏縄紋資料があり、数が少なく口縁部資料が無いが、柘の湖と同じく胴部まで裏面縄紋がある。なお、九合洞窟には繊維を多く含む破片があるという点が注目される（澄田・安達1967）。
- 4) 各地の洞穴より新出資料が得られ、最古の縄紋土器に関する議論が急転回を告げはじめた当時、小瀬が沢式土器（中村1960）が最古かという問題と直結した室谷下層・上層土器群の評価は、なかなか定まらなかった状況があった（芹沢1961a・b, 江坂1961, 鎌木編1965「縄文式土器編年表」など）。小林達雄氏がのちに述べたように、室谷の成果はまさしく当時の「既製の縄文時代観の大幅な変更を迫るものであった」（小林1985）のである。
- 5) 縄紋の多い型式群に関連して、山内氏は既に1963年の時点で、小瀬ヶ沢と室谷のデータを評価した上で、いわゆる小瀬ヶ沢式—室谷式（室谷下層土器群のこと）—井草式等、という系統観を披露している（山内1963）。
- 6) ただし、栃原岩陰の層位的関係はいかようにも解釈可能だとする岡本東三氏の危惧の表明（岡本1988）は踏まえないといけない。文献からの情報（小松1978, 西沢1982, 埼玉考古シンポジウムでの宮下健司氏作成資料など）や破片の注記からすれば、第9図1が—550cm付近（—520破片を含む）、2が—440—450cm、3が—550cm付近、4が—500—550cm、5が—450—500cm、6—9が—500cm付近、10が—530cm、

- 12が—500cm 付近, 13が—450cm 付近という深度で出土している。
- 7) 石畑岩陰下層の出土土器を柊の湖類似と考えることについては、巾隆之氏より教示を受けた。金子直行氏も同様の意見を述べている(金子1988b)。残念ながら石畑下層には口縁部がないが、筆者も柊の湖Ⅱつまりは三の原4類に近いものと考えている。
  - 8) 仲大地遺跡の表裏縄紋の土器(第12図1)が、小佐原・三枚原遺跡の類似資料であるかどうか、焼成前穿孔が存在するかどうか、筆者自身の目で確かめることはできなかった。なお、堀内・宮下論文では仲大地の井草Ⅰ式(第12図2)を井草式としないで、斜縄紋土器という紹介をしている。井草式の定義をはっきりさせないと、分布の縁辺部では土器の認定が曖昧にならざるを得ない例を示している。この土器は口縁部に縦長の補修孔2ヶ、胴部下半に円形の補修孔5ヶをもつが、いずれも焼成前穿孔ではない。
  - 9) 小佐原・三枚原遺跡と、増野川子石遺跡等との関係について、あえて型式学的議論を重ねれば、小佐原・三枚原が、ほぼ直立してきた胴部を、わずかに外にめくったという感じの外反口縁部をもつことに注意したい。これをより直立口縁に近い手法と考えれば、増野川子石などよりは古いものとも考えることも可能である。ただし、両者の型式学的関連については、小佐原・三枚原類似資料が北信以外でまとまって発見されれば、厳密な議論ができることとなる。
  - 10) 篠原氏の分類は、必ずしも口唇部の肥厚・外反を指標としていない。西ノ城の最初の報告で、口唇部の肥厚・外反の程度から井草式細分の可能性が示されたが、一方では、原信之氏が述べたように、口唇部断面形以上に紋様構成の違い「すなわち、口縁下(頸部)の縄文が横走あるいは斜走し、胴部以下が縦走するもの(井草Ⅰ)と口縁下からの縄文がすべて縦走するもの(井草Ⅱ)」(原1966)という違いを重視する考え方があり、佐原真氏も早くから井草式の縄紋の施紋方向や施紋順序を観察していた(佐原1956)。篠原氏の見方は、北総台地の多くの井草式遺跡を比較検討した上で出された編年案であるだけに、重視されなければならない。篠原氏の「井草Ⅰ式」は、口唇部に原体圧痕をもつ高根北遺跡例を最古とし、それを含み、口唇部に縄紋を廻転させ、口縁部には原体圧痕、あるいは横位、斜行(羽状)の縄紋を施紋する土器の一群であり、1a~1c式に細分されている。この篠原編年では、口唇部の肥厚・外反が著しいのは、むしろ井草1c式から2a式の段階となる。
  - 11) たとえば秩父の橋立岩陰には、典型井草Ⅰ式(芹沢・吉田ほか1967の第11図39)、側面圧痕とやや胴張りの器形をもち、裏面に指頭圧痕が残る石畑類似の土器(同第10図27)、さらに裏面縄紋が胴部まで及ぶ表裏縄紋土器(同第11図55・57)がある。こういった組み合わせをどのように解釈するかが、今後の重要な課題となる。
  - 12) 鳥浜貝塚の多縄紋資料について土肥孝氏は、既に1982年の時点で、「室谷第1群土器から柊ノ湖2式土器までの間を埋めるもので、撚糸文土器(井草式)直前の段階の様相をよく示している」という評価を与えている(土肥1982)。これは本稿の筆者の論点とまさしく一致するものであり、卓見であったと言わねばならない。
  - 13) 筆者が三の原と鳥浜・柊の湖の関係を基軸とし、主に視点を関東より西に向けたのに対し、宮崎・金子氏は関東の編年を基軸とし、西の土器を井草式に対比させる方針で編年を行なっている(宮崎・金子1989)。結果として、筆者が「表裏縄紋土器群」の一部の編年的位置を井草Ⅰ式以降に置いた点で、宮崎・金子氏の編年案と近いものとなった。ただし両氏が、室谷上層土器群(つまりは井草Ⅰ式期)の直前に室谷下層式をつなぎ、同段階に大谷寺Ⅲ式や仲道A、鳥浜の一部資料(C・E類)などを置いている点は、筆者と大きく見解が異なる点である。
  - 14) よって、三の原遺跡の1類・井草Ⅰ式と、2~4類の多縄紋土器の間には、やはり若干の時期差を想定しなければならないだろう。三の原遺跡には、直立口縁の中に混じって、外反口縁をもつ5類が僅かに存在したが、この5類が最も井草Ⅰ式に時間的に近いということになる。この点で、三の原遺跡の報告書の編年観を、訂正しなければならない。



引用参考文献

- 漆畑 稔・渋谷昌彦ほか 1986：『仲道A遺跡』大仁町埋蔵文化財調査報告第9集 大仁町教育委員会
- 江坂輝彌 1961：日本考古学上の問題点（三）縄文文化（一） 日本歴史153：77-86頁
- 大塚達朗 1989：草創期の土器，『縄文土器大観』1：256-261頁，小学館
- 大塚達朗 1990：窩紋土器研究序説（前篇），東京大学文学部考古学研究室紀要第9号：75-120頁
- 岡本 勇 1953：相模平坂貝塚，駿台史学3号：58-76頁
- 岡本 勇 1959：三浦郡葉山町馬の背山遺跡，横須賀市博物館研究報告（人文科学）第3号：1-13頁
- 岡本 勇ほか 1958：横須賀市平根山遺跡，横須賀市博物館研究報告（人文科学）第2号：1-21頁
- 岡本東三 1988：シンポジウム雑感，埼玉考古第24号：143-145頁
- 金子直行 1988a：押圧縄文土器と回転縄文土器，埼玉考古第24号：24-33頁
- 金子直行 1988b：草創期終末の土器群に関する覚書，埼玉考古第24号：154-159頁
- 可児通宏 1968：No.99遺跡，『多摩ニュータウン遺跡調査報告V』：78-137頁，多摩ニュータウン遺跡調査会
- 鎌木義昌編1965：『日本の考古学 II 縄文時代』河出書房新社
- 鎌木義昌・芹沢長介 1965：長崎県福井岩陰一第一次発掘調査の概要一，考古学集刊3-1：1-14頁
- 川崎邦彦ほか 1990：No.105B遺跡，『多摩ニュータウン遺跡 昭和63年度（第3分冊）』：1-107頁，東京都埋蔵文化財センター
- 栗原文蔵・小林達雄 1961：埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置，考古学雑誌47-2：38-46頁
- 小林達雄 1962：無土器文化から縄文文化の確立まで，『創立80周年記念若木祭展示目録』：6-12頁，国学院大学考古学会
- 小林達雄 1966：縄文早期前半に関する問題，『多摩ニュータウン遺跡調査報告II』：14-70頁，多摩ニュータウン遺跡調査会
- 小林達雄 1968：室谷第一群土器に関する覚書，歴史教育16-4：33-43頁
- 小林達雄 1977：縄文土器の世界，『日本原始美術大系 1 縄文土器』：153-181頁，講談社
- 小林達雄 1978：『縄文土器』日本の美術 第145号 至文堂
- 小林達雄 1985：新潟県室谷洞窟《縄文「草創期」から早期への土器の変遷》，『探訪縄文の遺跡 東日本編』：468-474頁，有斐閣
- 小林達雄 1987：日本列島における土器の登場—はじめにイメージありき—，国学院大学考古学資料館紀要第3輯：3-23頁
- 小林達雄 1989：縄文土器の様式と型式・形式，『縄文土器大観』4：248-257頁，小学館
- 小林達雄（司会）ほか1980：〔座談会〕縄文土器の起源，国学院雑誌81-1：19-63頁
- 小林達雄（司会）ほか1988：〔座談会〕岩宿遺跡発見前後と旧石器文化研究の展望，国学院雑誌89-1：16-43頁
- 小林達雄・安岡路洋 1979：縄文時代草創期における回転施文縄文への一様相，埼玉県史研究4：1-20頁
- 小松 虔 1976：栃原岩陰遺跡の押型文土器，長野県考古学会誌27：6-15頁
- 小松 虔 1978：栃原岩陰遺跡と押型文土器の出現時期，『中部高地の考古学』：83-93頁，長野県考古学会
- 埼玉考古学会 1986：—埼玉考古学会30周年記念—シンポジウム資料
- 埼玉考古学会 1988：シンポジウム「縄文草創期—爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題」埼玉考古第24号
- 酒井幸則ほか 1973：増野川子石遺跡，『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町地内その2—』長野県教育委員会：60-65頁
- 酒井幸則 1983：増野川子石遺跡，『長野県史 考古資料編』全1巻（3）：455-461頁，長野県
- 佐藤達夫 1971：縄紋式土器研究の課題—特に草創期前半の編年について—，日本歴史277：107-123頁
- 佐原 真 1956：土器面における横位文様の施文方向，石器時代第3号：25-36頁
- 篠原 正 1979：北総台地における縄紋時代草創期後半について，千葉県の歴史17：1-14頁

山形 真理子

- 篠原 正 1980：北総における井草式土器の細分、『笠木山遺跡発掘調査概報』富里村教育委員会・笠木山遺跡発掘調査会：32-36頁
- 篠原 正ほか 1983：『山倉大山遺跡調査概報』北総考古学研究会
- 渋谷昌彦 1988：仲道A遺跡草創期土器の編年学的研究、『考古学叢考』下巻：481-511頁，吉川弘文館
- 白崎高保 1941：東京稻荷臺先史遺蹟，古代文化12-8：10-21頁
- 杉原荘介・芹沢長介 1957：『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学文学部研究報告 考古学第二冊 明治大学
- 鈴木道之助 1974：下総台地における縄文時代初頭の文化，史館第4号：6-29頁
- 鈴木道之助ほか 1974：榎峠遺跡，『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』：149-209頁，千葉県企業庁
- 鈴木道之助ほか 1976：雨古瀬遺跡，『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』：165-186頁，千葉県企業庁
- 澄田正一・安達厚三 1967：岐阜県九合洞穴，『日本の洞穴遺跡』：188-201頁，平凡社
- 芹沢長介 1947：南関東に於ける早期縄文式文化研究の展望，あんとろぼす第8号：13-17頁
- 芹沢長介 1951：燃糸文と捺型文，考古学ノート第3号：1-2頁
- 芹沢長介 1954：関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察，駿台史学4号：65-106頁
- 芹沢長介 1956：縄文文化，『日本考古学講座』第3巻：43-77頁，河出書房
- 芹沢長介 1957：神奈川県大丸遺跡の研究，駿台史学第7号：102-146頁
- 芹沢長介 1959：日本最古の文化と縄文土器の起源，科学29-8：404-408頁
- 芹沢長介 1961a：日本最古？の土器を発見した中村孝三郎，日本3月号：208-209頁，講談社
- 芹沢長介 1961b：1960年の歴史学界一回顧と展望—先史・原史二，史学雑誌第70編第5号：8-13頁
- 芹沢長介 1962：土器の起源，自然1月号：29-35頁
- 芹沢長介 1975：『陶磁大系 第1巻 縄文』平凡社
- 芹沢長介・岡本 勇 1953：南関東に於ける燃糸文土器群の編年について，日本考古学会第11回総会研究発表要旨：6-8頁
- 芹沢長介・吉田 格ほか 1967：埼玉県橋立岩陰遺跡，石器時代第8号：1-28頁
- 関野哲夫 1988：東海地方の押型紋段階の様相，『縄文早期を考える—押型文文化の諸問題—』：152-275頁 帝塚山考古学研究所
- 高野博光ほか 1981：『布佐・余間戸遺跡』我孫子市教育委員会
- 高橋 桂 1982：三枚原遺跡，『長野県史 考古資料編』全1巻（2）：73-77頁，長野県
- 高橋 誠ほか 1985：『西の台（第二次）』船橋市遺跡調査会
- 土肥 孝 1982：縄文早・前期の土器 近畿地方，『縄文土器大成』1：137-139頁
- 土肥 孝 1986：神奈川県大和市上草柳第3地点東遺跡出土の土器—関東地方「井草式」以前の土器の様相—，大和市史研究12：48-86頁
- 土肥 孝 1988：渋谷昌彦氏の疑問点について，埼玉考古第24号：172-181頁
- 戸田哲也 1988a：表裏縄文土器についての所感，埼玉考古第24号：129-131頁
- 戸田哲也 1988b：表裏縄文土器論，大和のあけぼのⅡ：45-68頁，大和市教育委員会
- 友野良一 1982：向山遺跡，『宮田村誌 上巻』：302-318頁，宮田村誌刊行会
- 友野良一 1983：向山遺跡，『長野県史 考古資料編』全1巻（3）：445-454頁，長野県
- 鳥浜貝塚研究グループ 1979：『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—』福井県教育委員会
- 鳥浜貝塚研究グループ 1981：『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2—』福井県教育委員会
- 鳥浜貝塚研究グループ 1983：『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査3—』福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
- 鳥浜貝塚研究グループ 1984：『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4—』福井県教育委員会

多縄紋土器編年に関する一考察

福井県立若狭歴史民俗資料館

- 鳥浜貝塚研究グループ 1985：『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査5—』福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
- 鳥浜貝塚研究グループ 1987a：『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査6—』福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
- 鳥浜貝塚研究グループ 1987b：『鳥浜貝塚—1980～1985年度調査のまとめ—』福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
- 中村孝三郎 1960：『小瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎ほか 1964：『室谷洞窟』長岡市立科学博物館
- 中山吉秀ほか 1976：高根北遺跡，『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』：11-121頁，千葉県企業庁
- 西川博孝ほか 1984：『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ—No.7遺跡—』千葉県文化財センター
- 西沢寿晃 1982：栃原岩陰遺跡，『長野県史 考古資料編』全1巻（2） 長野県：559-584頁
- 奈良泰史ほか 1976：『仲大地遺跡』上野原町教育委員会
- 西村正衛・芹沢長介ほか 1955：千葉県西之城貝塚，石器時代第2号：1-20頁
- 西村正衛 1965：千葉県香取郡神崎町西ノ城遺跡，古代第45・46号：1-40頁
- 塙 静夫 1976：大谷寺洞穴遺跡，『栃木県史』資料編 考古1：141-168頁，栃木県
- 巾 隆之 1988：石畑岩陰遺跡，『群馬県史』資料編1：683-695頁，群馬県
- 原 寛・紅村 弘 1958：岐阜県柵ノ湖遺跡略報，石器時代第5号：1-14頁
- 原 寛・紅村 弘 1974：『柵の湖遺跡調査報告書』坂下町教育委員会
- 原 信之 1966：撚糸文文化の展開に関する試論，金鈴19号：12-18頁
- 原 信之ほか 1967：『鎌倉市大船山居遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 原田昌幸 1991：『撚糸文系土器様式』ニュー・サイエンス社
- 平子順一・石森英子ほか 1985：『大栗谷遺跡発掘調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 広瀬昭弘ほか 1977：『三枚原遺跡』木島平村教育委員会
- 広瀬昭弘 1981：北信濃小佐原遺跡の表裏縄文土器，信濃33—4：42-54頁
- 広瀬昭弘 1982：小佐原遺跡，『長野県史 考古資料編』全1巻（2）：68-72頁，長野県
- 堀内 真・宮下健司 1982：富士山麓における表裏縄文土器，信濃34—10：34-50頁
- 馬飼野行雄ほか 1983：『若宮遺跡』静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会
- 宮井英一 1985：宮林遺跡，『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原』：20-158頁，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
- 宮崎朝雄・金子直行 1989：井草式土器及び周辺の土器群について，研究紀要第5号：1-69頁，埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 矢島清作 1942：東京市杉並区井草の石器時代遺蹟—井草式土器について—，古代文化13—9：1-9頁
- 安岡路洋ほか 1977：『大丸山遺跡発掘調査報告書』大丸山遺跡調査会
- 山形真理子ほか 1991：『三の原遺跡』立教学院三の原遺跡調査団
- 山田昌久 1988：縄文時代草創期終末土器群の並行関係，埼玉考古第24号：138-142頁
- 山内清男 1937：縄紋土器型式の細別と大別，先史考古学1—1：28-32頁
- 山内清男 1939：日本遠古之文化（補註付・新版），山内清男先史考古学論文集・第一冊：1-44頁
- 山内清男 1963：洞穴遺跡の編年と年代，洞穴遺跡調査会会報6：4-6頁
- 山内清男 1968：矢柄研磨器について，『日本民族と南方文化』：63-87頁，平凡社
- 山内清男 1969：縄紋草創期の諸問題，ミュージアム第244号：4-22頁
- 山内清男・佐藤達夫 1962：縄紋土器の古さ，科学読売14—12：21-26，84-88頁

山形 真理子

図の出典

第1図～第4図：山形ほか1991文献より 第5図：鳥浜貝塚研究グループ1979文献より 第6図：原・紅村1974文献より 第7図：漆畑・渋谷ほか1986文献より 第8図：酒井ほか1973・酒井1983文献より 第9図：西沢1982文献より 第10図：巾1988文献より 第11図：広瀬ほか1977・広瀬1982・高橋1982文献より 第12図：奈良ほか1976文献より 第13図：原ほか1967・馬飼野ほか1983文献より

## A Chronological Study of *Tajomon* Pottery between the Lower Muroya and Igusa types.

Mariko YAMAGATA

This paper discusses the chronology of the Incipient Jomon pottery known as *tajomon*. Although some limited cordmarking had been used in the early Incipient, *tajomon* pottery of the late Incipient phase represents the first major use of that decorative technique in the Jomon period. *Tajomon* pottery is found throughout Japan but is especially common in central Honshu.

Some Japanese archaeologists place the division between the Incipient and Initial Jomon phases with the beginning of *yoritomon* pottery where cords wrapped around a stick were rolled down the surface of a vessel. I prefer to see *yoritomon* as part of the *tajomon* tradition, however, and assign them both to the Incipient phase. This is because, although *yoritomon* sites in the Kanto are numerous and well-studied, the corresponding ceramics of the regions surrounding the Kanto are still obscure. I thus believe it is premature to divide the Incipient and Initial phases on the basis of the Kanto sequence alone.

The first type of *yoritomon* pottery is called Igusa after the site of the same name in Suginami Ward, Tokyo (No. 13 in Fig. 14). A long sequence of *tajomon* pottery was excavated in 1960 at the Muroya Cave in Niigata Prefecture (No. 1). The pottery was grouped as the Muroya Lower Layer type. Sherds of the Igusa type came from the upper layer of this cave, but the problem has long been the length of time which elapsed between the lower and upper layer assemblages.

Recent excavations at the San-no-hara site on the east coast of the Izu Peninsula in Shizuoka Prefecture (No. 28) have given us the chance to fill the gap between Igusa and Lower Muroya. The Lower Muroya assemblage is similar to *tajomon* pottery from the Torihama shell mound in Fukui Prefecture (No. 37) and can be considered to correspond chronologically. The *tajomon* pottery at Torihama appears to continue after the disappearance of the Lower Muroya type. It is this late phase *tajomon* at Torihama to which the San-no-hara *tajomon* is most similar. A further resemblance can be seen between San-no-hara and

the *tajomon* from Hana-no-ko in Gifu Prefecture (No. 35). These similarities between *tajomon* ceramics at three widely-separated sites (Torihama and San-no-hara are some 300km distant on opposite sides of Honshu) is extremely important. It means that the *tajomon* assemblages of the intervening areas of the Chubu region, which had been generally considered to date to before the Igusa type, should most likely be placed after the San-no-hara *tajomon* and therefore contemporary with the Igusa type of the Kanto.

An important task for the future is thus to develop this chronological framework further in order to investigate links between the *yori'itomon* pottery of the Kanto and the *tajomon* wares of the Chubu. On the basis of that research we will be in a better position to discuss the problem of the division between the Incipient and Initial Jomon phases.